連句

猫蓑作品集Ⅵ

序

平成七年乙亥の歳は天災・人災たて続けの大厄年であった。しかしながら幸いにも、猫蓑会としては直接の被害は軽く、五月の藤祭り・十月の時雨忌もめでたく終ることができ、何より嬉しかったのは五月十七日、中川哲・中島啓世・中田あかり・内田麻子・坂本孝子・副島久美子・市野沢弘子、七氏の立机式が行なわれ、改めて猫蓑会の質的補強が完成されたことであった。

「猫蓑作品集」も平成三年以来、五回に及んだ。しかし、従来は投稿されたものをただそのまま審査しないで、掲載して来たのであったが、これでは玉石混淆の恐れがあるので、今回は、一応私が見て添削したものを出すことに改めた。また一つの試みとして、私の加朱した作品を数名の人に批評していただき、それを通して、猫蓑作品の実態を、より具体的に皆さんに分かって貰いたいと

考えたのである。

もし、この試みが成功するならば、毎年、作品と批評者を変えて続けてみたいと思う。そして、これが猫蓑会作品向上の一助となれば幸いである。

平成八年一月廿一日

東　明　雅

目次

序……東　明雅
秋袷　膝送り……東　明雅　加朱　6
合評……明雅・守英・博之・健悟　司会・文責　和子　8

歌仙
夏深し……市野沢　弘子　捌　20
蘇東坡……今宮　水壷　捌　22
綿虫に……岩井　啓子　捌　24
十薬や……内田　麻子　捌　26
風入れの……小原　正子　捌　28
椎若葉……大窪　瑞枝　捌　30
あばれ梅雨……加藤　道子　捌　32
秋灯や……加藤　治子　捌　34
紅葉かつ散る……文音　淑子・貞子　36

残る秋……蒲原　志げ子　捌　38
あぢさゐに……倉本　路子　捌　40
師走の風……坂本　孝子　捌　42
鳥渡る……真田　光子　捌　44
薄氷を……式田　和子　捌　46
雪の嶺……繁原　敏女　捌　48
土用芽……下鉢　清子　捌　50
半夏生……杉内　徒司　捌　52
狂句木枯……杉山　壽子　捌　54
冬至粥……鈴木　美奈子　捌　56
那須野の夜……須田　智恵　捌　58
玉苗の……武村　利子　捌　60
初懐紙……橘　文子　捌　62
放生会……田村　満子　捌　64
山峡の霧……豊田　好敏　捌　66

風薫る……文音　良子・哲　68
額咲くや……中島　啓世　捌　70
冬鷗……中田　あかり　捌　72
花の庭……萩原　てる子　捌　74
藤房の……橋野　代々子　捌　76
初空や……八角　澄子　捌　78
夏椿……東　郁子　捌　80
水のうへ……百武　冬乃　捌　82
山滴る……文音　健悟・玄麿　84
金木犀……村田　冨美　捌　86
力士の扇子……本屋　良子　捌　88
明神平……八代　嫋　90
動詞型の……山口　美恵　捌　92
源心（二十八韻）
三の酉……梅田　利子　捌　96
返り花……上月　淳子　捌　98
爽涼や……神谷　安子　捌　100
朝霧や……副島　久美子　捌　102
夜神楽の……原田　千町　捌　104
二十韻
切子碗……両吟　正江・明雅　108
鰯雲……猪子　春治　捌　110
夏の萩……岡本　道子　捌　112
漱石忌……五味　蓉子　捌　114
牡丹かな……文音　孝子・貞子　116
秦野……権頭　和弥　捌　118
秋の渚……雑賀　遊　捌　120
檀紅葉……膝送り　英子・好敏
茂・明雅　122
水の香……高瀬　美保　捌　124
辛夷咲く……高橋　豊美　捌　126
西鶴忌……椿　紀子　捌　128
浜木綿……長坂　節子　捌　130
水ぬるむ……細川　研三　捌　132

広重の橋……松本　碧　捌　134
吹き抜くる風……峯田　政志　捌　136
半歌仙
女礼者……浅賀　淑代　捌　140
むら燕……稲葉　道子　捌　142
根深汁……沖津　秀美　捌　144
夏の句会……小野　シズ　捌　146
夏椿……久保田　庸子　捌　148
濃紫陽花……桑原　美津　捌　150
菖蒲池……膝送り　英子・幸子
憲助・茂　152
かがり火に……佐々木　有子　捌　154
寒蜆……佐藤　良彌　捌　156
入学や……篠原　達子　捌　158
少年の眉……島村　暁己　捌　160
実朝忌……長崎　和代　捌　162
古雛や……両吟　かりん・紀子　164
とびの魚……町田　順風　捌　166
植木市……山崎　一恵　捌　168
表合わせ
冬萌や……膝送り　英子・碧
好敏・篤
茂・秀樹
憲助・明雅　170
あとがき……下鉢　清子　171

膝送り　秋　袷

墨東に残る物日や秋袷　東　明雅
　みせすがきの新涼の月　筒井紅舟
松茸の香のいつまでもただよひて　近藤蕉肝
　ファミコンゲームに子等のむらがる　宮坂保徳
冬籠縁にひろげる週刊誌　舟
　大綿虫のゆるやかに飛び　雅
はるばると越後湯沢の出湯町　徳
　指にしみつく人の約束　肝
火遊びのつもりがいつか黒焦げに　雅
　女房に隠す古き文殻　舟
魂をゆらす祝詞の朗々と　肝
　夏場所間近怪我が気になる　徳
訶梨勒を吊りて魔除けの魔が騒ぐ　舟
　狼吠ゆる月暗き山　雅
カウボーイ銀の金具のガンベルト　徳
　紙巻の灰吹きとばしつつ　肝
長堤をゆるゆる下る花見船　雅
　浅蜊蛤売れ盛りなり　舟

東　明雅　加朱

画眉鳥(ナオほほじろ)の籠を広場によせあつめ　肝
何も分からず列に加はる　徳
若者が羽織袴の大一座　舟
ブラジル・ペルー・メキシコの旅　雅
親戚のプレジデントと酔ひ痴れて　肝
裏金つひに尻っ尾つかまれ　徳
短夜に覚め邯鄲の夢淡く　雅
すだれ通して濡れ場丸見え　肝
草庵は浮世之介のすてどころ　舟
遺産はいつか錆びた屑鉄　徳
村祭剃刀坊主が踊りでる　肝
口にくはへてならすひょんの実　舟
缶(カウ)ジュースころがり落ちし月の駅　雅
持病の薬ハンドバッグに　肝
今齢となっていよいよ呆けはじめ　徳
娘と二人飾る雛壇　雅
幻のおもかげ浮ぶ花の奥　舟
碑に降るあたたかき雨　肝
※印度の匂袋　徳

平成七年十一月五日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

合　評

東　明雅・野崎守英
丹下博之・佛渕健悟

司会・文責
式田和子

司会　皆様、新年おめでとうございます。
今日はお忙しいところ、お集り頂きありがとうございました。
今回は猫蓑作品集の新企画として、合評会を持ち、先生のお話も頂けましたら、何より勉強になると思いますので、どうぞ忌憚無くお話くださいませ。先生、よろしくお願い申し上げます。

明雅　作品集になにかいい企画は、というわけです。よろしく。

司会　それでは、歌仙「秋袷」一巻ざっとお読みになってお感じになったところからお話しくださいませんか。

守英　それでは、ほめるところと、難をつけたいところとがありますが、ほめるところから。上手いな、とほめたくなるのは、手慣れていること。付けるカン所に言葉が決っていることですね。難をつけたいところは、パターンが決っていて、それ以外には出ていない事でしょうか。

博之　一巻全体としての詩的空間は意外に狭く、より高くより遠くへという詩的うねりにやや欠けているような気がします。それなりによく出来た作品だと思いますが、やや物足りなさを感じました。

健悟　全体として上手いなあと思ったことは、校合のポイントが行き届いていることです。助詞の「の」が句作りの同じ場所に出ないようにとか、体言留めが続かないようにとの配慮が感じられます。序破急のある作品ではないかと思いました。ただ、現代性がもう少しというか…。

表　六句

司会　それでは、初めからまいりましょう。

博之　「みせすががき」という言葉、実は知らなかったものですから、辞書に当ってみると、「江戸吉原で張見世を開く合図に弾く三味線」とありました。こうして時・座は脇で一転、江戸吉原の遊郭にタイムスリップしたわけです。脇句でこのような例は無いのではないかと思い

ますが、それはそれとして、面白い一つの試みだと思います。しかし、それにしても、江戸、吉原とは特殊過ぎたのではないでしょうか。「すががき」程度でよかったのではないかと思います。第三に当った人は大変だったのではないでしょうか。

守英　「物日」「みせすががき」「訶梨勒」など、僕個人の意見としては、注をつけるのは賛成ではないが、注をつけなければ分らないのはなるべく出さない方がいいのではないでしょうか。

明雅　注をつけなければ分らないものは、私もあまり賛成ではないが、訶梨勒は面白かったから、この座の人々が許したのでしょう。

博之　座では許されても、文字にするとずれが出ます。

明雅　そのための注じゃないですか。澪東とか、秋袷が恋がかりだから、ちょっと特異だが座も許したのでしょう。

博之　それに季戻りの感もあります。角川の『図説俳句大歳時記』では、秋袷は仲秋となっており、また実感としても新涼過ぎてからのものではないでしょうか。

明雅　秋袷は山本健吉氏の季寄せでは三秋です。季の問題は地方・個人により難かしいので、一応は季寄せに従うのが原則でしょう。

司会　発句が色っぽいから脇にこう持ってきたということでしょうか。

守英　観光用の「みせすががき」と考えては。

明雅　連句の中に、現代使われていない、すたれた用語、用具を使うなという事は、私も師匠芦丈先生から厳しく教えられました。たとえば「砧（きぬた）」というようなものは、歳時記にはあっても現代それを使うところはないのだから、決して詠んではならぬと呉々も教えられたものです。但し、それでは何が何でも昔の用語や用具は使えないかと言うと、それは違うと思います。まず、この句の前句にある「物日」という語も、現在は殆んど残っていない昔の用語なのです。「みせすががき」は「物日」に全く応じた語であって、いわば空想の世界です。ただ「みせすががき」というと限定されるから「すががき洩るる新涼の月」位にした方がいいでしょう。このように、過去の用具・器物は詠まないという原則も適用する場合は機械的にあてはめないで、いろいろの事情を勘案する必要があります。

司会　それでは第三へまいります。古典の世界から、普通の家庭にもどった転じです。

博之　この第三はなかなか苦心の作だと思いますが、口調のせいか、やや胴切れのような感じがしなくもありませんか。

明雅　上五・中七・下五、それぞれ意味が中で切れていないから、これでいいと思う。

守英　まあまあの第三ですね。四句目は軽くといいますが、これは安易な付けではないですか。先生いかがですか。

司会　A・C・Cでいつもいうように、猫蓑式のパターンです。ファミコンゲームが工夫でしょうか。

健悟　猫蓑流といえば猫蓑流ですが、現代に持っていきたいという気持が伝わります。

守英　五句目の特徴は？

明雅　月の定座だから、丈高く出すべきだが、月は出てしまったので。

司会　月のかわりの苦心の作りではないでしょうか。

守英　言葉の選び方にも工夫がもう一つあっていいと思うのです。例えば、

　縁にひろげる大漢和　ではどうですか。大漢和は滑稽でしょ。

司会　大漢和は俳諧ですね。

明雅　松茸は位の高い高級な物だから、位の打越をきらって週刊誌としたのです。

司会　大漢和は重いですね。はい、六句目にまいりましょう。

健悟　表六句の運びからいって、あわてていないで、この六句目はいいと思う。

博之　この折端は落ち着きがあっていいですね。

裏

司会　それでは裏に入りましょう。

守英　恋句は難かしいといつも思うが、この恋句は熟してないと思う。

博之　ウ2「人の約束」とはいわないのではありませんか。「固い約束」くらいの方がわかりやすい。

守英　ウ1・2はここまでは展開があります。固い約束とは決りきったことになりますから、人のほうがいろいろに読めます。だが、3で火遊びといってしまっては、こういうことだよ、といっているだけでつまらない。

明雅　これは雪国の駒子だけでは恋にならないので、もう一句恋をつけたまでです。

守英　ダメ押しのむこうに出て欲しかった。

博之　ウ4の文殻。古めかしい高い調子の言葉ですが、ここに登場している人物にはいささかそぐわない〝位〟をもっているような気がしますね。

守英　女房楽しむ古き文殻　のほうが面白い。

健悟　これは古風に過ぎるかなと思う。いま座で、恋句は

こう詠めば恋句になるという余裕がありますが、もっとチャレンジする方向が欲しいような…。

司会　私は下品ですから、

　女房に隠す古きレシート　なんて…。

健悟　こういう風にディテールを描いた方がパターン化を脱していいですね。

　ゥ5で祝詞を出して、恋をひきずらなくしたのがいい。

博之　魂をゆらすこの句はややオーバーで付味が悪いような気がします。

守英　魂をゆらすとかで、場面と気分をかえるという効果があります。次のゥ6、夏場所怪我が気になる　は猫蓑流では？

司会　必要なところへ必要なものを入れる。

守英　新らしい言葉を盛込むことと、いままであるもので変化を計るのと、どちらが必要か、という問題があるのではないでしょうか。

明雅　夏場所は前句の気分をそのまま受けていますが、怪我で病体を出してすこし変化をつけたのはうまいと思う。

守英　付けとしては、びっくりしないから、読者としては意外性を感じないということでしょう。

健悟　訶梨勒は意外性がある。

博之　ところで「魔除け」と「祝詞」は打越すのではないでしょうか。「訶梨勒」は本来邪気払いのものらしいので、邪気払いとすればよろしくはありませんか。

明雅　祝詞とは神道の儀式に唱えて祝福することばです。訶梨勒は印度のもので、部屋にかけて薫りをたのしむ全く別のものです。「魔が騒ぐ」が打越になり、「邪気払い」なら打越にならないという論は納得できません。五十歩百歩ではありませんか。祝詞に本当に打越になるのは、魔ではなく、邪気払いでしょう。

健悟　注をつけるものは一巻に一つくらいはあってもいいのでは。

博之　ここぞというはまりどころでパッとね。

守英　単語のもっている魅力で訴えるということもありますが、それを消しても読者に訴えられるのではないか。読者を内側から驚かすようなものを出したらどうでしょう。

明雅　訶梨勒が出て、いかにも日本的なダラダラした気分が切れたように思う。

健悟　言葉を順当に用いるというのは基本ですが、同時にバサラやキザや、いろんなものがくぐり抜けていく一巻が面白いかと思います。捌きの嗜好や許容が見えてしまうところですが。

守英　先生、芭蕉の恋句はどうして素晴しいのですか。

明雅　芭蕉の恋句については、「ねこみの通信」二十一号の「Q&A」で、私の意見は述べておりますので、あれをお読みいただきたいのですが、さらに一言付け加えるならば、芭蕉の人間に対する愛情が、それらの恋句の中に満ち満ちて、自ら「さび」と「しおり」をかもし出しているからでしょう。恋句を作る時、その句の中に新しさを求めることも必要でしょうが、しみじみと人を打つものも必要でしょう。そして、いつも新しい発見を追求しています。

司会　魔除けから狼にいったのですが。

健悟　狼の句は良くおさまってますね。

守英　一座がとるということについて、いかにもカウボーイの姿が決まりきっていすぎる。僕が捌くならとらない。捌きとしてとる基準はさまざま、ということですね。

明雅　狼からカウボーイを出したのはいいが、銀の飾りが当り前すぎるということ？

博之　銀の鋲が打たれているあれですね。口調はいいが、ぶっきらぼうな作りですね。

　カウボーイ銀鋲打ちしガンベルト　とか。

明雅　それでは勢が出ない。

健悟　転じは決っていますね。次の句でマカロニウェスタンになった。

博之　紙巻きは手巻きタバコのことですね。それなら手巻きの方がわかりやすい。

　手巻きの灰を吹き飛ばしつつ　では。

司会　銀の金具のあしらいで、灰が飛ぶで動いてよかったと思います。

明雅　一般のカウボーイなら「手巻きの灰を…」の方が「紙巻きの」より合っているでしょう。しかし、このカウボーイは銀の金具のガンベルトをしているお洒落な、あるいは裕福な人物ですから、紙巻の方がむしろ位に合うのではないでしょうか。また、次の「花見船」にも手巻きでは、もちろん合いません。

司会　では、花へまいりましょう。

守英　けっこうよい面白い花です。芦丈先生が夜店のステッキということを言っています。より添うような付と、夜店のステッキとの間を探すことが必要だと思いますが、浅蜊・蛤はつきすぎと思う。

明雅　こういうのもあっていいのでは。あまりつきすぎではないよ。

守英　一句一句驚きたいと思えば物足りない。

健悟　驚きの質ですけれど、遣句でも感心させられる場合もあります。

博之　これはこれでいいと思う。

健悟　この折は、場面とか気分とかが打越から切れて、三句目にきっちり転じていますね。

博之　この花の句〝付けるより寄せろ〟といった感じの作り方で、「ゆるゆる」の一語で付味もよくなっています。次の浅蜊の句は付き過ぎの感はありますが、かえって落着くのでよいのではないでしょうか。あまりアッチいきコッチいきではせわしくってくたびれてしまいますよ。

健悟　ウェスタンから和風になって転じがよく見えます。転じということは、私はいつも難しく考えてしまうんですが、正岡子規の『俳諧大要』あれはちょっと問題点もありますけれど、転じのことを説明して、打越と同趣向ではいけない、さりとて正反対のことを詠んではいけないとあり、この人はものを実践的に考えた人だと思いました。非Aということであっても反Aではいけないわけですよね。

名残りの表

司会　それでは名残りの表に入りましょう。

博之　画眉鳥は頬白あるいは、ほほじろでよかったのではありませんか。

明雅　普通のほほじろと書いてもいいが、この字を書くと中国の風習になるのです。北京や上海でよくこのような風俗を見ますよ。

守英　ゥが越後湯沢ではじまり　ﾅｵは画眉鳥で中国を考える。面ごとに場所をかえることの意味はどういうことでしょうか。

明雅　そんな必要はありません。むしろ、場所をかえるというより、一巻の考え方として、ｫ少年、ｩ青年、ﾅｵ壮年、ﾅｳ老年期という考え方でいいと思う。

守英　ｩとﾅｵとの違いは？

明雅　ｩは一応おもしろく、ﾅｵはおもしろさの限りをつくす。暴れるところとして、草庵とかすだれ越しの恋をつけた。

健悟　何にもわからず列に加はるはいいやり句です。

明雅　戦後は行列と見ればすぐ並んで何でも買ったのでしたね。経験した人はよくこの句が分るでしょう。

司会　（ウンとうなずく）

博之　よせあつめは自動詞。加はるも自動詞ではありませんか。ともに自の句でしょう。

明雅　「よせあつめ」は他動詞です。「画眉鳥の籠を広場によせあつめ」これを中国あたりの風俗だと考えると、それは一人の人が多くの鳥籠をよせ集めるのではなくて、鳥籠を持った人を多くよせ集める意でなくてはなりませ

ん。それなら当然人情自他半でしょう。解釈によっては自とも他とも取れるでしょうが、次の次「若者が羽織袴の大一座」は、はっきり他ですから、まあ、自他半の句と見る方がよい。大体、この自他場の説は転じを考える場合、最も有効で、且つ簡便な方法に違いないのだが、これにとらわれてはなりません。そのことは「芦丈翁俳諧聞書」で芦丈先生が口を酸っぱくして申しておられる通りです。私は自他場を捨てて心法で捌いたり、人に心法を教えたりできないので、自他場の説を中心に教えておりますが、その代り、自他場の判定には極力寛容であろうと考えています。

守英　芭蕉の連句は一句一句が立っている。一句が一つの意味を示していると思いますが、「何も分らず列に加はる」というのは一句としての立ち方が曖昧に感じられます。

明雅　一句が立つというのは、その句が独立した意味と形をもっているというわけですが、発句と違って、平句ではその独立の程度が問題です。前句と付句と一つになって全くの詩情が出来る。また次の付句によって別の新しい詩情が生まれる。これが連句というものです。付句の一句一句はあまり、完全な意味と形を持つことは反って嫌われるのです。「何も分からず列に加はる」この程度で十分です。

守英　作っている人同志が分りあえばよいか、一句一句座にいなかった者にも読んで分るほうがよいかということをどう考えますか。

明雅　この位なら一座にいなかった人にも分ると思う。

守英　芭蕉にはこういう付はないです。現代連句では許されるということかどうか、考えてみるに値いしましょう。

明雅　例えば芭蕉にも、「ひたといひ出すお袋のこと」とか、「こぼれて露はどこへ行くやら」など軽い句があります。とぼけた味というのもいいんだよ。

健悟　『武玉川』は付け合いの短句でしょうが、「抜いた大根で道を教へる」なんてのは、これと同じだと思いますが、十分一句独立ですよね。

司会　次へまいりましょう。

健悟　若者はよく転じています。

博之　若者はアングラ劇団員なのでしょうかね。ジーパンでないのがいい。相撲取りの羽織袴では面白くない。

健悟　親戚は藤森氏ですか、面白い。

守英　マイナス部分でいうと、「ブラジル・ペルー・メキシコの旅」は考えやすいパターンです。

博之　多少の工夫があってもいいのでは、ブラジルを出てペルー・メキシコとか。

守英　プレジデントは面白かった。

博之　ナオの後半で暴れが始っていますが、場所としてずい分後ですね。私など待っていましたとばかりすぐに暴れたくなる。そして、すぐに息切れる。

明雅　まあ、ギリギリのところでしょう。

司会　普通捌いていると、ここまで我慢ができないのです。さて次。

明雅　次の裏金は時事句で、ご存じ韓国大統領の面影の句です。

守英　恋句としてこの恋はいいのか？　しおりがないような気がします。隠れた色気はあるでしょうが。

博之　この辺り、もう一句恋をとってもいいのではないかと思いました。

明雅　ナオの恋句は「すだれ通して…」と、草庵は浮世之介の…。」この二句ですが、「短夜に覚め…」は恋の呼び出しです。この三句にもう一句恋を付ける必要はありません。浮世之介とは好色享楽をほしいままにした人の意で、西鶴の「好色一代男」の主人公世之介が放蕩の挙げ句勘当されて、十九才の時、入谷の草庵に住んだのを面影にしています。「すだれ通して…」は露骨な句ですが、それを確かに転じています。

守英　これだけでは下品の滑稽ということで、その先でもう一つ、下品の上品がほしいですね。上品な恋を持って来て欲しいと思います。

司会　場の機会性の問題でしょう。

博之　9句目の「いつか」は、ウ3句目にもあり、少し目障りですね。かなり離れているからよいのかな…。

博之　ナオ10は後との関連で云うと秋の句のはずですね。村祭りでは夏の句。季移りのうえ秋二句となってしまいます。

明雅　そうじゃない。ここは踊りで秋の句なんだよ。

健悟　ここで剃刀坊主が出てきて、ドキッとする語感ですね。

博之　浮世之介と剃刀坊主は似ているのではないかと、これを読んだ女房がいいました。

明雅　浮世之介は西鶴の小説の主人公で、このような人物は現実の人間とはしないからこの句は場。剃刀坊主は他の句です。

博之　ところで先生、秋袷が発句にあるので村祭りとされたと思いますが、発句にある字は一巻に再び使わないというのはどういうことですか。

明雅　「挙句に発句の字を使わない」というのは『俳諧無言抄』にも出ていますが、これを押しひろめた形になって、発句を大切にするために、月花以外は発句にある字

を使わない形になっていますね。

博之　漢字ばかりの発句もあるが、あとがきついのでは…。

明雅　それを切り抜けていくのもスリルがあって面白いでしょう。現代連句では一巻の中に全く同字を許さない結社が多くなりました。それに比べれば猫蓑はまだゆるやかであるともいえましょう。

守英　芭蕉は平気で同じ字を使っていますね。

明雅　割に平気ですよ。芭蕉は一巻の歌仙の中に、同じ字を何回使っても、同字三句去りの式目さえ守っていれば、決して咎めだてをしておりません。

　現代連句の中には、猫蓑でもたとえ面が変っていても、同字を使うことを嫌う人がいますが、それは余りに極端だと思います。あまり、拘泥すると自由な作品が出来ないと思いますが、せめて発句の字位は再用しない、この位の注意は欲しいのです。

守英　単語の意外性以外に、表現の姿の意外性をどこで出すか、という問題があると思います。

博之　8の「ひょんの実」は季語の使い方として、うまいナァと思います。あわてて季寄せをペラペラ、ともかくも季を合せ揃えるというのでなく、自家薬籠中のものにしたうえで、これを効果的に使用する…。いいですね。句もよくなれば付味もよくなる。早くそうなりたいものですね。

健悟　響がよくあっています。

守英　式目の話でいえば、ここでは月はこぼしていますね。それに月は皆一句の下にいった。缶ジュースは洒落ているようで、型にはまっている。

健悟　背中を掻いてもらったりすると、痒いところが転々と移動したりしますが、取材の仕方がそういう痒いところに上手に触れていったみたいで、その点は面白いです。

守英　そういう意味でのうまさは僕も感じますが。

名残の裏

健悟　挙句はよく決っていますね。

博之　花ですが、昔の言葉としては、おもかげは恋ですね。

司会　連歌ではそうですね。

博之　匂いの花に恋を出したら、挙句も恋とおもいますが、このおもかげはどうでしょうか。時々迷うことがあるものですから。

明雅　恋ではありません。恋の花なら挙句も恋をつけますが、挙句も恋ではありません。おもかげを恋の詞とし、それを使って恋句を作るのは連歌の時代、あるいは俳諧でも貞門の時代までで、芭蕉はそのような恋句の作り方

を否定しています。現代連句では勿論、おもかげという語を使っても、すぐ恋句にはなりません。

健悟　一巻についていえば注文があります。現代がもう少しいきいきと出てほしいと感じますし、もう少し無器用でも未熟なエネルギーが加わってもよいのではなかったかと思います。

守英　連句は広くいえば詩・詩情を切り開く面もあるべきではないか、細かくいえば花の奥　ぐらいに詩情があるだけで、剃刀坊主――意外でよいのですが、松茸は詩情が低く、器用な云い廻しが不満です。

博之　この一巻もそうですが、最近の連句には哀れとか悲しみを上手に詠み込んだ句が少なくなりましたね。これはいかんと思ってもなかなか自分では作れない。これも時代のせいなのでしょうかね。しみじみさがありません。

明雅　歌仙一巻は、前にも言った通り、このあわれにもかなしく、そしておかしい人生の諸相を描き、うたうものですから、なるべく広く、新らしい世界から題材を求めるべきでしょう。しかし、新らしく珍らしい題材ならばよいというわけではなく、自ら、ありふれたもの、平凡なものも、その取り上げ方によって、新しい詩材とすることができるでしょう。一句一句珍らしく新らしく詩情のない句ばかり並べた作品を私は好みません。それは反って一巻のいわゆるヤマ場が見えず、全体が平板に見えるおそれがあるからです。表は少年期、裏は青年期、名残の表は壮年期、名残の裏は老年期と考えると、一巻の纏りがよく付くと思います。表は穏やかに、裏ですこし面白く、名残の表でおもしろさの限りを尽し、名残の裏でうまく納める。これが昔から言われた歌仙のパターンですし、私はそれを守って行きたいと思います。

司会　一句の中に悲しいとか淋しいとかいわず詩情を出すのは難かしいですね。

健悟　僕は、剃刀坊主にひょんの実をつけたようなうまい納め方は出来ないので感心しました。

司会　今日は有益なお話をたくさんお聞かせいただけて、ありがとうございました。厳しいご意見が多かったですが、よい指針となりますことでしょう。先生、ありがとうございました。

平成八年一月八日　於　新宿滝沢

◊歌　仙◊

夏深し

市野沢弘子　捌

川風にそよぐ草叢夏深し　市野沢　弘子
水着の子等の賑やかな声　穴澤　篤子
引き出しへ玉蟲包み納むらん　豊田　好敏
紫煙くゆらす縁側の端　金久保　淑子
月天心まっすぐな道麓まで　浅賀　淑代
編みし俵をトラックに積み　萩原　てる子
念願の文学賞に温め酒　敏
年上女房さすが控へめ　篤
嬉しげに結婚指輪きらめかせ　淑
ポケベルの鳴る雑踏の中　る
無党派層選挙参謀票読めず　淑
鱈ちりつつく北国の月　敏
どか雪に積りどかどか雪となり　篤
網棚の荷のふいに消えたる　同
人形の腹に麻薬を押し込んで　敏
あくび出さうな牧師説教　代
オルゴール花の真昼を奏でつつ　淑
おらんだ坂を下るうららか　代

羊(ナオ)の毛刈れば羊のさっぱりと　敏
おてんこ盛りの小屋の麦飯　淑
済みしこと又催促の惚けはじめ　る
貧乏ゆすり何故か止まらぬ　代
パンストを脱がす背中の汗臭く　敏
鏡天井彼の肩越し　篤
たそがれの電光文字の流れをり　る
評判通り野茂の投球　敏
濃紺のトートバッグに夢をつめ　代
盆の休みを告げる貼紙　淑
盛り塩に月皓々と登り窯　る
秋の七種一つ忘れて　篤
消(ナウ)しゴムのいびつの形父らしく　同
孫に語りし戦争の傷　淑
円高も株の安値も底ならん　代
ＣＤジャズを文鳥と聞き　同
峠路眼下に白き花万朶　弘
春雷の後雲のゆるやか　る

平成七年七月十九日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

蘇東坡

今宮　水壷　捌

蘇東坡と対酌やせむ十六夜　今宮水壷
白茅刈萱風の颯々　篠原達子
飽きもせず子はひょんの実の笛吹いて　倉本路子
従兄弟どうしのどこか似てをり　梅田利子
片言の英語通じぬ飛行場　須田智恵
うるさき蝿を追ひつ出札　松本碧
だぼ鯊のクールボックスいっぱいに　利路
臍だしルックリュック背負って　同
がっぽりと形成外科の稼ぎどき　恵
惚れた弱みでつきとほす嘘　達
※※
神楽坂・横寺・箪笥・袋町　路
小さき画廊のピエロ連作　利
冱つる月ポアロは髭をアンテナに　碧
馬で陛下は凩の中　恵
見はるかす陵線しるく山聳ちて　達
元祖と本舗並ぶせんべい　利
つっかひ棒やっと花咲く老大樹　碧
囀を聴く揺り椅子の午後

蜃(ナオ)気楼立つと息せく電話なり　利
カルヴァドスには夢があふるる　惠
映画百年バーグマンいまいづこ　碧
背のびすることあほらしくなり　利
順ぐりに自他場じたばた汗みどろ　達
ぐるぐる回るあめんぼうたち　碧
釣書きのめっきり減った三十路過ぎ　利
あばたもゑくぼ年下の聟　同
なんとなくシルバーパスの身について　惠
加賀の宿りに片割の月　惠
添水鳴りみくまり様のしづもりぬ　達
かかしの用もなさぬ陣笠　惠
トランプ(ナウ)の城を崩した憎い奴　利
へっつい幽霊鍋を覗きに　達
牛乳を朝昼晩と飲み続け　路
また来年へ延ばす卒業　碧
友集ふ月光そそぐ花の園　壷
蛙が啼いて池の賑ひ　碧
※神楽坂近辺の四つの町名　路

平成七年九月十日　首尾
於　源心庵

綿虫に

岩井　啓子　捌

綿虫に逢へさうな午後坂の町　倉本路子

はや咲き初めし垣のさざんか　橘　文子

冬座敷児は笛吹きてきりもなし　佛渕健悟

学芸会のポスターを描く　山崎一恵

渡し船荷を下ろす間に月昇り　岩井啓子

鶉の籠はひっそりとして　悟

遺(ウ)りたる多摩の白壁禅寺丸　路

剣士についてゆきし新妻　悟

嫉妬せる男の視線矢となりぬ　恵

身の丈の倍伸びをする猫　文

上方の落語見台前に置き　恵

銭勘定はまたたきのうち　文

宇宙飛ぶインターネット土用月　恵

キャンプファイヤー集ふＯＢ　路

廃校舎太宰気取りで呷る杯　文

黒の手帳を床に打ちつけ　悟

寄り添ひしひとのやさしも花明り　路

ふたり揃って春風邪をひく　文

炉(ナオ)塞の棚に残りし古き鍋　恵
あさりしぐれの弁当の味　路
レシーブトスそこでアタックすかさずに　同
穴から覗く髭の会長　悟
人気取る子役頼りの旅一座　路
並行輸入バッグフェラガモ　恵
北京にもラスベガスにも待つ女　文
鍼であやつる惚れ心とや　悟
玉繭の中にこもりてみたる夢　同
東司の掃除はげむ新発意　文
夜なべする母の想ひ出形見分け　恵
月の翳さす藍の大甕　文
豊年ぢゃ(ナウ)「あきたこまち」に「ほほほほのほ」　路
おらが村でもラップはやりで　悟
幾億のムルロワの貝物言はず　路
てのひらに座す鉛筆の雛　悟
花吹雪やうやく解けし魔法陣　啓
霞立ちをり遠き峰々　恵

平成七年十一月十三日　首尾
於　新宿・角筈文化センター

十薬や

内田　麻子　捌

十薬や降りみ降らずみ潦　式田和子
小鮫鷸の飛び交へる空　内田麻子
シャーベット人数分にとり分けて　中川哲
子に教はりつスーパーファミコン　上月淳子
霧の塔朱色にまろき月透かせ　中島啓世
秋蚕をあげて煙草一服　哲
お馴染に大吟醸と鰡のへそ　淳
片言混りおせっかい焼く　和
思ひ込む気性と知らず深い仲　哲
五百羅漢に似た男在り　和
流木を乗せ濁り河滔々と　淳
柊をさす街道の軒　世
月光の藪に狸の餌づけして　淳
捨てる髪ありアデランス有り　和
サミットのシラクは核をゆづらずに　麻
地を這ふ如く漂ひて生く　哲
阿里山に染井吉野の花万朶　世
春のショールの衿かき合せ　淳

鏡（ナオ）の間面を付けて人丸忌　和
売店で買ふ半切の軸　世
4WD駆って故郷母の許　哲
スピーカーよりロックギンギン　世
女郎蜘蛛ずいとおりくる恐しさ　和
脊に立てたる爪の赤筋　淳
夢ならず時も止まれるわが快楽　和
最新式の点滴を受け　哲
番台は親爺・婆さん交替で　同
忘れた傘の無くならぬ箱　和
駅裏に繊月ほのか道迷ふ　哲
蝗と知らずつまみたるもの　世
鎮（ナウ）守様ゆらりと供ふ新豆腐　淳
野茂完封にテレビ湧くころ　麻
放浪のシールべたべた旅鞄　淳
句碑の拓本とりてうららか　和
二分咲の花に思ひを残す村　麻
磯巾着の並ぶ岩陰　世

平成七年六月二十七日　首尾
於　関口芭蕉庵

風入れの

小原　正子　捌

風入れの古きみ寺や秋深む　橘　文子
一葉を屋根に銀杏散る庭　加藤　道子
月ななめ厨支度もほぼ終へて　豊田　好敏
便箋に打つワープロの文　田村　満子
最果ての町ＳＬで客を呼び　金久保　淑子
腰をかがめて昆布干す人　萩原　てる子
麦桿帽幅広リボンカラフルに　小原　正子
ラップののりで愛の告白　文
今此処で認知せよとはおぞましく　敏
すったもんだで元の弁護士　道
Ｊリーグイチロー人気に蹴とばされ　正
騎馬始には堂々の武者　る
寒灸耐ゆる背中に窓の月　文
交す挨拶折目正しく　淑
訶梨勒の五色の紐の長く垂れ　満
印度旅行のパンフ届きぬ　道
奉納の子供歌舞伎に花吹雪　淑
蚕ざかり過ぎてくつろぎし村　道

日ねもすに岩を洗ひし春の涛　満
連ドラばかり廻すチャンネル　文
肩口に生霊見ゆと巫女の言　敏
餓飢腹薄器拝見に出し　満
大いなる通俗といふ夏の富士　文
待宵草てふペンションの有り　道
次々とモデル口説きし偽画伯　る
抱いてあまりし肉の厚さよ　満
新調の上衣誂らふ一番館　淑
甃踏みポリス巡回　文
蜂の子と月を肴に友と酒　満
榁櫨の熟れて重き嬶の座　文
爽やかに積年の夢語り居り　る
大正ロマン昭和モダンで　敏
シャッフルの指の動きの鮮やかに　満
銀行員の続く転勤　淑
列島を貫ぬき植ゑし花の帯　正
遠き野面を雉のほろほろ　る

平成七年十一月一日　首尾
於　鎌倉　おうめ様

椎若葉

美しや百人町の椎若葉　下鉢清子
　幟を飾る遠近の窓　大窪瑞枝
柔らかにカットグラスを磨きゐて　椿紀子
　好きなCDリピートで聞く　雑賀遊
帆走の水脈白々と月の湖　中川哲
　下り鮎待つ影の動かず　髙橋豊美
僧堂に新酒の樽を届けたる　清
　法もものかは繁き逢引　遊
「思ひ出」の復刻判に挾む文　豊
　傘の印の続く天気図　遊
ASEANに金だけやって嫌はれて　哲
　アングルを変へ写す被写体　清
優駿の轡取りをり厩務員　紀
　北の原野の風疼く月　豊
夜咄は熱きココアを啜りつつ　紀
　入籠の筥にいっぱいの夢　清
半蔀を上げ爛漫の花仰ぐ　紀
　かくれんぼ呼ぶ長き夕暮　遊

大窪　瑞枝　捌

切岸（ナオ）のこんな所に烏の巣　清

吉本興業東京進出　哲

阿呆かいな親兄弟も縁を切り　同

解脱説かれて入れあげし日々　遊

二十歳過ぎピアスひとつを耳につけ　清

もう離れない※※カーミラのキス　遊

蒜を陰干しにして梁太く　豊

たらちね住める厚き藁屋根　遊

敗走の兵に覚えの道標　紀

自由市場で買った勲章　哲

サポーターウェーブは月の下に揺れ　遊

風ここちよく酌める石榴酒　紀

作曲（ナウ）の音譜にうつすちっち蝉　豊

するりと消えしデジタルの刻　清

長椅子でフロイト先生大欠伸　豊

鶯餅のきなこお髭に　哲

かっぽれの出番待ちをり花ふぶき　瑞

参道灯る春の提灯　豊

※※カーミラ……女の吸血鬼

平成七年五月五日　首尾

於　俳句文学館

あばれ梅雨

加藤　道子　捌

あばれ梅雨歩道をかくす水飛沫　加藤　道子
高く巻き上ぐ夏の暖簾（のうれん）　式田　和子
胡麻豆腐程よく冷やし塗皿に　蒲原　志げ子
スリッパ履けばそろり階段　橋野　代々子
アルバイター月にＦＡＸ長々と　大島　富美子
ころころころとえんま蟋蟀　萩原　てる子
限（ウ）定の新酒一本提げて来る　和
娘からかふ客の溜まり場　げ
金髪のロックシンガー金が無い　和
有閑マダムの恋のペットに　美
街路樹の手入れよろしく駅の前　代
巻いた夕刊罪名の数　る
吸入器湯気にぼんやり覗く月　代
納め庚申柴又の寅　同
スラングに英文法も役立たず　げ
オールスターに選ばれし栄　美
卒寿なる媼の守る花大樹　和
拓本を取る春光の中　る

港(ナオ)町魚島を知る旅となり　げ
　満艦飾のトラックの列　同
さきがけか自民党かと目をこらし　げ
　腹当いやと駄々をこねる児　和
虫封じ打つ鬼子母神効きめなく　代
　たらし込んだる妓は二名もつ　美
焚火して後を追うたと噂する　代
　チョーク転がる玉突きの台　和
ストレスをサウナで直す小学生　美
　盛り付け上手父の手料理　げ
さざ波に望砕かるる池の端　る
　秋惜しみつつ常夜灯消す　美
うそ(ナウ)寒に鴉覚えし旧家の名　る
　かすれ押さるる古地図落款　げ
夢に見しロンドンブリッジ今渡る　道
　ゴスペル歌ふ人の駘蕩　代
翠山のところどころの花の彩(あや)　道
　野がけ興じつ巻きし一巻　る

平成七年七月五日　首尾
於　鎌倉　おうめ様

秋灯や

加藤　治子　捌

秋灯や庭を隔てて水の音　谷本守枝
友と呑みほす盃に満月　小園好
蔓引けばぬかごころころこぼるらん　長坂節子
担保の土地はすでに値崩　月山壹
門柱に墨黒々と転居先　繁原敏女
キャンピングカー覗く犬と子　由川慶子
コーラスの仲間に入りし鵜鼓鳥　岡本道子
煙草を吸ひにそっと離れる　女
相合傘初対面とは思はれず　枝
口紅のこるワイシャツの胸　壹
心理学まなびて腹を立てられず　道
英国の茶の香り優雅に　慶
凍てし月真夜のビル街眠らせて　女
懐手してよろけ往く人　節
五十年特攻隊の生き残り　慶
現が夢で夢が現か　好
龍ケ渕解きつ結びつ花筏　節
峠を越えて飛んでゆく蝶　慶

骨壷（ナオ）のはつかにぬくき春の宵　八木　聖

一間廊下父の揺椅子　矢崎　藍

なつかしきバナナボートで投げる野茂　節

パラボラアンテナ雨に打たるる　藍

叱言など言はせぬ蟾の面構へ　壹

村の社に黒鯛を供へて　節

世情また騒然としてヘリコプター　聖

その気になれば毒も盛ります　女

手枕にふとかきあげしほつれ髪　原　みね子

女てふほどかなしきはなし　藍

盆踊り去りたる後の月明り　節

空になりたる鈴虫の籠　藍

ぶらり（ナウ）旅リュックの人と秋惜しむ　枝

牌楼くぐり食らふ餡饅　壹

腰痛を隣の猫に愚痴りをり　藍

俄庭師の剪定の音　女

花曇自分を許しつつ生きて　聖

遠山霞かかる御岳　治

平成七年九月十九日　起首

平成七年十月十七日　満尾

於　豊田短期大学

紅葉かつ散る

文音

金久保　淑子
米谷　貞子

献茶式紅葉かつ散る四脚門
　鵤の高音に仰ぐ昼月
冬仕度早くせねばと気のせいて
　あやとりの児の切りもなかりし
宅配のピザのバイクは定時刻
　汗うっすらとにじむTシャツ
清水（ウ）掬む胸より金の首飾り
　きのふのことは酔ひのたはぶれ
いそいそと女房きどりの愛らしさ
　帳場格子に似合ふ算盤
新進党どこへ廻すの奉加帳
　闇汁の箸しかと手応へ
凍空に利鎌のやうな月の出て
　ヅロアスターの鳥葬の跡
齢のわり元気印と噂され
　前衛の書に墨をたっぷり
咲く花に湖畔明るき美術館
　尾根のかすみて靡く綿雲

子遍路は飴玉なめつ村ざかひ
　紙芝居屋の透る声色
アラジンのランプに浮ぶ夢あまた
　冒険旅行プランあれこれ
白樺の林の先は海展け
　犬も焚火へ口笛で呼ぶ
ひた隠す少年の恋雪ぼたる
　年増好みは遺伝子のせい
大名の裔と書き出す回想記
　呂宗の壷がでんと床の間
月仄か友にすすめる氷頭膾
　心待ちする秋の狂言
京の路地かまつかの丹もさだまりぬ
　婆の手を引き通ふ鍼灸
歯車のすこしずれたる受け答へ
　日本語勉強故国はなれて
スマッシュをきめしコートに花の舞ふ
　春の讃歌を流すラジカセ

平成六年十月十五日　起首
平成七年三月二十五日　満尾

貞淑

残る秋

蒲原志げ子　捌

旧道に残る秋あり地蔵尊　蒲原　志げ子
牡蒿（をとこよもぎ）を分けて出る月　中川　哲
藝術祭油彩やうやく乾かして　式田　和子
打ち間違への困る番号　橋野　代々子
声かけて振り返る人知らぬ人　本田　八重子
隙間風入る駅の待合　登坂　かりん
ずっ（ウ）しりと重き魚籠置く懐手　大島　冨美子
プロポーズなら今と呟く　松田　多恵子
ハイミスのしかとチャンスを摑へん　美
親代々に猫がのさばる　和
大盃を飲み干すおやぢ県議選　哲
三回転のダイブ成功　代
満月に裸足でラップ輪になって　恵
止める気のない核の実験　り
地図拡げ今度の旅行どこにしよ　哲
医者しぶしぶと太鼓判押す　和
花守は腰を伸ばして仰ぎみぬ　美
句碑建立の苑ものどらか　重

めかり時うっそりと出る竜之介　和
声帯模写は得意芸なる　美
パソコンに漫画イラスト操って　恵
崖横這ひに遊ぶ子供等　同
値札みて越前蟹に泡をふき　美
皮羽織着て頭挨拶　和
結ひかけの潰し島田で立膝に　哲
唾のみ込んで飾り窓ゆく　恵
見はるかす半凪の海砥粉色　代
恨五〇〇年姓は一文字　り
鉦叩片月に鳴く納屋の隅　代
芋煮会へとかつぐ大鍋　り
秋祭り浅黄水干禰宜のゐて　代
生きてる限り宝籤買ふ　和
茫洋の夢路はいつも二十代　代
シフトダウンで下る勾配　哲
咲き誇る花は史実を黙しけり　重
初篤にはらからの呼ぶ　げ

平成七年十一月一日　首尾
於　鎌倉おうめ様　り

あぢさゐに

倉本　路子　捌

あぢさゐに触れてスイッチバックかな　倉本路子
連立ちゆけば山の滴り　佛渕健悟
釣瓶鮓詩歌談義のきりもなし　峯田政志
髭の形のすこし変って　岩井啓子
アトリエの窓に写りし赤き月　橘　文子
昨夜（よべ）よりつづく邯鄲の声　今宮水壷
聖（ウ）徒祭猫の假装でうきうきと　佐々木有子
メルヘン童話書き溜めてゐる　文
三年間定時定刻ラヴコール　有
ふっと魔をみる流し目の底　文
面差しの稚く在す阿修羅佛　壷
革袋より酌みし生酒（なま）　啓
風紋の凍てつく砂丘月仰ぎ　志
犯人（ほし）追ひかけてつひに歳晩　悟
いつの間に消えし番組またひとつ　志
曲線定規で遊ぶ幼児　文
花の下ラップにのせる博多弁※1　啓
蟷に似るとはオイがことかい　壷

移（ナオ）された欠伸を移す春の暮　有

学会済みて巴里見物　悟

全自動ファジーに回る洗濯機　啓

竜巻投法野茂に喝采　文

甚平をはみ出すほどの尻を持ち　有

新党領袖茶柱に笑む　悟

アラジンにランプを貰ふ夢の中　路

ほっぺについた煤拭いてやり　壷

夫の座を妻に譲りし幸せは　文

古稀を間近に出でし智恵熱　壷

月の庭荒さずひとりテコンドー※2　悟

秋の風にも濃きと淡きと　壷

屋台引く坂の向うを雁渡る（ナウ）　啓

国際学級響く口笛　有

じゃんけんに一拍ずれるタイミング　啓

ポケベルぽたと落とす斑雪に　志

晴の日の記憶の中の花ふぶき　路

厨のぞいて戻る姫虻　志

※1＝語り調の歌

※2＝韓国空手

平成七年七月六日　首尾

於　紀州鉄道箱根強羅ビラ

師走の風

坂本　孝子　捌

森下の風真向ひに師走かな　坂本孝子
路地を三曲り寒木瓜の紅　今宮水壷
紙漉場職人衆の声もなし　橘　文子
微調整して流すＣＤ　大窪瑞枝
超高層ビルの横腹月出でて　篠原達子
拝み太郎の振りあげし斧　文
あの面の内は誰やら牛祭　枝
少女子の如肌の燃えくる　達
ひと拭の除行液もて消した恋　枝
砂に埋もれる島の空港　文
死んだふりばれてしまった保険詐欺　達
背赤後家蜘蛛箸でつまみぬ　文
梅雨の間の月を肴に独り酒　壷
営林署員習ふパソコン　枝
網の目の見事にはしる壷の罅　文
阿蘭陀渡る城の襖絵　壷
花に狂ひ小姓はいつか獅子の精　枝
しばしまどろみ春の夢見む　文

弁当の菜飯ほどよき塩加減　達
口でしくじる俄幇間　壷
そのセーターうしろ前ではないですか　達
我が新居には床柱なく　枝
親分の出所に並ぶ高級車　同
触れれば強く匂ふニコチン　文
野暮と粋夜毎に変る閨の客　壷
またの御召しを待って百年　同
掛時計ホテルの歴史刻みをり　文
穂高連峰鳥渡る頃　達
月を浴び湯瀧に籠り遊行の忌　枝
ほかほか温き茹栗を買ふ　同
万葉歌とく韓国語冷まじく　壷
知るも知らぬも旅の道連れ　達
巡業の明荷が積まれ体育館　同
老人会の襷鉢巻　孝
唯仰ぐ戦なき世の花吹雪　同
鮎放流を告げる有線　達

平成七年十二月三日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

鳥渡る

真田　光子　捌

友を待つ駅のホームや鳥渡る　真田光子
月見団子の並ぶ重箱　水鳥ますみ
銀杏を拾ふ児の声弾みゐて　村田冨美
綱を解かれし犬の駈けゆく　倉本路子
次々に届く句集を積み重ね　み
窓辺に飾る玉歯朶の鉢　路
にっこりと昼寝の頬に浮かぶ笑み　み
分別のほか年上の女　美
共棲みの月日のほどに似るふたり　み
救世観音の朱き唇　光
案内図片手にひらく遊歩道　美
買ひしパソコン操作分らず　路
中空に幻月凍ててぼんやりと　同
下駄の緒きつく酉の市まで　み
酔ふほどに核の談議のかしましく　美
環礁めぐる紺碧の海　み
花吹雪少年野球本塁打　美
腰伸ばしゐる耕のひと　路

園庭(ナオ)のトーテンポールかぎろへる　光
古代遺跡の旅を夢みて　み
急階段病者年寄りゆっくりと　美
雲踏み外す久米の仙人　路
眼福のちらと蹴出しの白い脛　み
ほうほうほうと青葉木菟啼く　同
気にかかるテレビドラマのストーリー　美
円安ドル高ゆらぐふところ　美
急かされて打ち間違ひし計算機　路
光琳・乾山合作の皿　路
チョモランマ峰皎々と望の月　光
包の隅にてちちろ鳴きゐる　美
菊(ナウ)膾予後二十年健やかに　美
神も佛も在はす現し世　路
広縁にコンペのパター磨くらん　同
明日のことは明日まかせに　み
東屋へ登りゆく坂花万朶　み
うしほまねきに干潟ひろびろ　光

平成七年九月十三日　首尾
於　新宿角筈センター　美

薄氷を

式田　和子　捌

古希祝

薄氷をふみて通りぬ古希の道　式田和子

幾度見しか匂ふ白梅　佐藤良彌

蕨餅おのもおのもに分くるらん　今宮水壷

マーと叫べばジャンと答へる　鈴木慎二

纜を解く間にのぼる三日の月　池田やす子

色なき風に寂と草形（くさなり）　穴澤篤子

BS（ウ）に映る異国のハローイン　中川凡彌

ダービン生きる僕の眼裏

先刻（さっき）の娘和服に着替へ雑踏に　篤壷

撫でてはたいて酒瓶の底　壷す

消費税五パーセントに上がるてふ　す凡

黒い噂の部長くしゃみす　凡篤

冬月の成層圏を飛機の旅　篤壷

折紙の鶴数へつつ折る　壷彌

マスゲーム人名となり波となり

卓球台を運ぶ男ら

いづこより入り来し余花ぞ掌に

大沢崩れかかりゐる虹

呼ばれしに脱ぐか着やうか海水着　篤

押し当てられた固き銃口　村山

へらへらは常のこととて幇間　加津枝

親の意見はだんだんに効く　壷

渋滞の路は工事の柵ばかり　枝

聖天様の前の初市　す

料亭の内のざはめき女正月　篤

猫も居られぬ痴話喧嘩なる　枝

去り状の強いつもりがすぐ気弱　同

有明に濃くコーヒーを淹れ　彌

ふるさとは露に露置く八重葎　凡

昔蛸今は蜉蝣　壷

オプションの増えて不便なファクシミリ　篤

ゐざって渡る夢の浮橋　枝

静寂を切りて指揮棒舞ひ始め　す

春愁の窓すこしあかりぬ　凡

花万朶穴太の衆の積みし城　篤

たもで掬うて嬉し若鮎　和

平成七年二月十日　首尾　壷

於　伊豆長岡　竹峰荘

雪の嶺

繁原　敏女　捌

春まだき「鐄ちゃん」と呼びて親しみし七十翁逝く翁の北庭より見はるかす御岳白し

鐄ちゃんとついの別れぞ雪の嶺　矢崎　藍

照れた笑顔の遺る冬ざれ　八木　聖子

トラクターエンジン音の軽やかに　繁原　敏女

うま酒抱きしうたたねの夢　柿本　時代

月さやか父も胡坐する奥座敷　後藤　志津枝

みやまりんどう筒のむらさき　稲垣　渥子

爽籟に生なりのシャツを靡かせて　聖

現代っ子の見合願望　岡本　道子

帰る背に好きと言うても間にあわず　長坂　節子

つり銭の出ぬ角の自販機　月山　壹

孫の描く犬は画用紙はみ出して　谷本　守枝

夜店に誘う友の大声　聖

行水の盥にうつる月の影　小園　好

多忙をさいて遊ぶ歌会　加藤　治子

無精ひげ剃り残りたりそのままに　壹

恩賜の時計いつもご自慢　月山　富佐子

円空の佛の在す花館　治

サイクリングでママさんの春　好

芥菜（ナオ）を和えればぴりり味もよく　津代
朝のけんかはよしにしようね　道女
中国に世界の企業おしよせて　藍聖
機下の大地に包（バオ）の点々　森佳子
かなしみはサファイアの青き灯のごとく　由川慶子
唇付けまでの長きためらい　壹守
ひたすらに恋をするとて奮われて　同好
木枯すさぶ坂多き町　慶渥
先祖の名梵鐘にあり太き文字　治藍
遊び足りずに児は帰りゆく　女原
暈の月そろそろ家もリフレッシュ　みね子
秋を惜しみて莨一服
枝々（ナウ）に小鳥を宿す樫大樹
悠久の刻ガラパゴス島
海底のタイムカプセル取り出して
ぐんぐん揚がる知事さんの凧
花万朶見得を切ったり六代目
浅黄の幕に双つ蝶舞う

平成七年二月八日　起首
平成七年四月十七日　満尾
於　豊田産業文化センター

土用芽

下鉢　清子　捌

なかんづく土用芽しるき薔薇の垣　下鉢清子
片蔭拾ひ川沿ひの町　八代　嫋
蜊蛄に触れたがる児が踊り場に　佛渕健悟
郵便受にメールいっぱい　橋野代々子
皎皎と月照り渡る操車場　五味蓉子
夜勤を終へて帰るやや寒　松本　碧
おひろめの地酒待たるる文化祭　悟
ピエロおどけて投げキッスする　代
嘘つきのひとの残せし紅の跡　嫋
新々宗教捜査着々　悟
ミャンマーはスーチー女史を解放し　碧
狐の提灯見えつかくれつ　蓉
底冷の蔵の格子戸月さして　嫋
全輪駆動ふるさとの径　碧
カラオケの賞金稼ぎとうたはれぬ　代
有給休暇きっちりと取り　健
花ふぶく浮桟橋に人の群　同
三宝柑の香りほのかに　蓉

大本山永平寺領鴉の巣　嫋
優勝狙ふ強化合宿　代
目ざむればスクープ報道載るデスク　悟
臍を噛みつつ啜るコーヒー　碧
薪能乱拍子踏む主役の技　代
羅を被て妙齢の鬼女　嫋
帰らない帰れないなど拗ねに拗ね　清
マザコンあやしベンツせしめる　悟
真贋の論争の裏画商肥え　蓉
古雑誌よりかまどうま跳ぶ　碧
望の月ビルの菜園覗くごと　代
予備高生が爽籟の中　嫋
方丈記おくのほそ道まる暗記　蓉
シルバーパスで都内観光　同
コラーゲンたっぷり入りし茶が流行り　嫋
文通の囲碁すでに終盤　悟
花の苑馬に試乗の夢ひとつ　清
G線上のアリアうららか　碧

平成七年七月十九日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

半夏生

杉内　徒司　捌

半夏生淡き日の射す小名木川　東　郁子
紫色に熟るる桑の実　市野沢　弘子
園児等の下駄箱閉ぢる音のして　浅賀　淑代
客なき時は猫と戯る　杉内　徒司
月昇る山の稜線ほのと染め　郁
籠に貰ひししめじ椎茸　弘
長ウ電話秋狂言に誘はるる　郁
産寧坂に嫁きし姉君　代
そもそもは旅の途中の食当り　弘
一点睨む屋根のシーサー　代
伝統の芭蕉布を織る資料館　郁
煤掃きすみて月に酌む酒　代
夜話に俳句の講師招かれて　弘
ジャズも得意のジャンルだといふ　代
音楽寺急階段をひと息に　同
串焼団子並ぶ店先　弘
花びらは観光バスの内までも　郁
スプリングコート脱いでたためる　代

上(ナオ)り築一網打盡うぐひ取り　郁

小諸城址に藤村の詩碑　同

若き等の矢場に集へる日曜日　代

お目当ての人いつか射止めん　弘

煮え切らぬ男ばかりに恋をして　代

大風呂敷のくせに弱虫　郁

鬱病は気の持ちやうと思へども　同

訳のわからぬハイジャックなり　弘

氷水とけて流れてあともなし　郁

シャーリーテンプル・ジンジャーロジャース　司

半生を住みし僧院月青く　代

窓をあければ渡る雁　弘

そぞろ寒(ナウ)戦に散りし友語る　郁

好みを聞いて淹れる珈琲　代

スイッチオン画面は快打プロ野球　郁

鳥語木語の言葉はやれり　弘

花の精めきし歌姫花に舞ふ　司

覚めもやらずに春淡き夢　代

平成七年七月二日　首尾

於　江東区芭蕉記念館

狂句木枯

杉山　壽子　捌

狂句木枯野水跡地で巻く歌仙　杉山壽子
山茶花こぼる古への村　山田歌子
羅針盤船長しかと確かめて　武村利子
膝の雄猫喉をころころ　猪子春治
街道の軒にあまねき大月夜　細川研三
焼米を炒る香ただよふ　田々宮かんばし
秋澄んで若先生の聴診器　田部みどり
ピアスの穴がぽっと染まりて　宮川侊子
マーブルのテーブルにあるは誰の文　くのあや
電話連絡次へ次へと　長谷川芳子
強地震のがれきの前に佇つばかり　織田康子
ここで止まれと祈る十字架　浅井沙衣子
月涼しまるまる太るややの顔　芳三
モデルを前に汗をかきつつ　利り
学会の鞄の中にコミックも　衣芳
とび石を行く軽き足音
鯉群れて鯉の尾に曳く花筏
野立の席に蝶も着席

青(ナオ)き踏む背筋伸してまっすぐに　壽
シガレットケース出して休息　利

偏頭痛治れば癪がまたそぞろ　服部　美代子
飛機で移植の腎の運ばる　侊
キャリヤーといはれボーナスどっさりと　利
小唄師匠と熱燗で酌み　代
いつまでも帰したくない帰せない　利
揉事つひに民事訴訟へ　侊
おみくじは当てにならぬといふ人ら　代
魔法使ひのランプ欲しくて　壽
稲妻に月も驚きかくれんぼ　代
さしばの渡る頃の賑はひ　侊
婆(ナウ)さまの手こなの寿司と柿なます　代
エンジンかけて調子上々　利
あのころの夢追うたこと懐かしみ　代
果物を売る店に番傘　侊
愉びの歌ハミングす花の下　壽
レガッタ収む早稲田慶応　利

平成七年九月三十日　首尾
於　名古屋住友クラブ

冬至粥

鈴木美奈子　捌

冬至粥艶やかに煮て老迎ふ　鈴木美奈子
ポインセチアの燃ゆる身ほとり　坂本孝子
白鳥のわたり来し空吹き晴れて　穴澤篤子
残月を負ひ登校の児ら　中川哲
障子貼り部屋に流るるビブラフォン　岩井啓子
筬かたかたと送る新機　孝
境内に力士幟の並びたち　橘文哲
ソバージュヘア隠す恋情　孝
部長には長患ひの妻がゐて　篤
気学占ひたよる毎日　奈
ＰＫＯ任務済ませて吸ふ煙草　啓
マンタゆらりと泳ぐ海峡　篤
夜汽車行く清和の月を中天に　孝
雀卓囲む避暑のつれづれ　哲
一升壜ころがるままの高鼾　北村良輔
用心のためピストルも持ち　文
大江戸の長堤に舞ふ花吹雪　孝
小紋の糊に立てる陽炎

復活(ナオ)祭牧師説教心地よく　篤
金縁眼鏡ベルモンド風　啓
サイン会トイレもじっと我慢して　哲
馬と契りしおしら様なり　孝
短夜の軋む枕のあはれなる　篤
戦果自慢に弾む大法螺　奈
のれん引くうすき肩にも北颪　文
針山赤し祖母の代より　同
清里のアンティーク館ガレの壷　啓
畑一枚売って留学　輔
月に向け翼の浮力を限界に　輔
曲弾きの撥秋を彩り　孝
邯鄲(ナウ)を尋ねて友の草の庵　輔
ワープロ口述埋めゆく夢　哲
政界の引退記念回顧録　孝
為替相場のややに落着き　輔
踏みしだく花ひとひらをいとしみて　文
少年の手に高く繰る凧　奈
　　啓

平成六年十二月二十三日　首尾
於　桃径庵

那須野の夜

須田　智恵　捌

音の無き那須野の夜や新走り　須田智恵
月あはあはと薄雲の中　峯田政志
芸術祭ポスターやっと刷り了へて　百武冬乃
「ら抜き」言葉の議論かしまし　木村眞呂
一心に園児の覗く箱眼鏡　神谷安子
あめんぼめぐるそよ風の池　松本碧
ラメ入りのシフォンの裾の悩ましく　佐古英子
ディープキッスはラシャメンの技　碧志乃
坂道を修道僧の靴響く
時計塔より鳩の飛びたつ　英同
無遅刻と無欠勤とで輩ぬき
喘息怖いマスク外せぬ　安眞
寒の餅搗き上げられし宵の月
父母すでに無き遠き故里　英碧
国内線在来線と乗りついで
犬百匹と暮す幸せ　碧乃
凪ぎ渡る浦の弓手は花岬　眞
駐在さんも耕しの頃

春深(ナオ)し絵をみるツァーイタリヤへ　碧
エスプレッソは午後のテラスで　乃
原選手殿堂入りも早きまり　志
人間万事有終の美を　安
涓滴を掬ひ乍らの山の道　英
見ざる聞かざる言はざるの石　安
定年に離婚話を切り出され　眞
バストが迫る暗闇の中　英
相場師の金を得し頃肥りすぎ　志
江戸川河口日がな釣バカ　碧
萩の寺月にしづもる仏達　眞
小さき蓑虫畳這ひゆく　安
晩秋(ナウ)の次期宰相と噂され　志
ガーター勲章クイーン授与する　英
老いてなほポロの競技に参加して　安
空にぽっかり飛行船浮く　碧
天守より夢かと紛ふ花万朶　智
業平蜆苞に求めぬ　英

平成七年十一月八日　首尾
於　池袋　滝沢

玉苗の

武村　利子　捌

玉苗の背丈五寸や箱の中　武村　利子
田植の準備植機調節　田々宮かんばし
鱧鮨を染付皿に取り分けて　田部　みどり
畳の縁を踏まぬならはし　浅井　沙衣子
月呼んで子とろ子とろと遊ぶ子等　杉山　壽子
団栗独楽はポケットに入れ　織田　康子
古寺（ウ）の仁王の足に秋の蝶　衣
擬似餌と知らずもらふ青年　壽
恋心ぱっと燃え立ちがむしゃらに　康
ポアしなさいとグルが命令　利
村近き富士の裾野は寒々と　り
看板筆太「めし」に冬月　衣
小説のねたを探して爪を噛み　壽
重き財布はじゃらで膨らむ　り
高々とトランペットの音流れ　康
留守番はいや姉も妹も　し
莫蓙敷いて美し酒酌む花の下　同
婆のツアーの写真おぼろに　壽

ブリュッセル小便小僧春の色　衣
澄し顔して猫がながなが　壽
大津絵の鬼が出てくる夢のなか　康
開き直って見得を切る阿呆　同
※だやあつうの旦那の後をチビ丁稚　り
マントでふはり隠す情人　壽
くっさめの声もかぼそくいとほしき　衣
瞬きの間に鴉水浴び　し
白黒の映画このごろ流行だし　り
野菊咲く径低き道標　し
教会の△屋根に月の鎌　康
補助線足して答へ爽やか　壽
学かいに主治医出席休診す　り
メジャーリーグへ移籍活躍　康
復旧の駅に集る応援団　し
指切りげんまんいつもおほげさ　壽
西行墳おん鎮まりて花ふぶく　利
石段抜けるうらら風韻　衣

※名古屋弁で粋の事

平成七年六月十四日　首尾
於　名古屋住友クラブ

初懐紙

橘　文子　捌

初懐紙橋二つ越へ来りけり　橘　文子
鳥總の松の挿さる木戸口　式田　和子
うぐひすの鳴き声真似る児等のゐて　岩井　啓子
パッチワークで細螺入れ縫ふ　斉藤　八千代
弥生尽月に墨の香漂ひぬ　中村　ふみ
駅売り新聞全部買ふひと　和
ずたずたの阪神市街大震災　代
制服姿頼もしく見え　啓
昼寝覚もう髭の濃き頬を寄せ　み
尼となりしを悔む祇園会　和
涛の音寄せて返して太古より　代
屁こき虫にも五分の魂　同
綱打ちのよいやよいやと月の宴　和
毒茸捌く包丁の冴え　啓
掌の長命線を自慢して　代
年子の姉を呼び捨てにする　み
花の雨能楽堂にたたむ傘　代
仔猫ひっそり階段の下　和

プロヴァンスワイン杯挙げ春の旅　船本志紅　み
甲冑着けし幽霊に逢ひ　紅
超能力数値で測る研究者　啓
うちの僕ちゃん将棋名人　代
枯木にも枯木の事情絵筆執り　紅
思ひ切ったる身に疼く風　和
鞭打ちに耐へて女の恨み節　文
若き男をまねくフェロモン　み
どんどんどんおまへ寝てるか生きてるか　和
錆びし起重機工場の月　啓
定食の丼飯に鯊揚げて　み
菊人形に鬼平の貌　和
世の為になるか政党分裂し　紅
箱を開ければ箱が出てくる　啓
広告の裏も広告目を皿に　代
多趣味と言ひて片付けぬ部屋　み
この道のいよよ厳しく花の奥　文
遠霞してなだらかな山　紅

平成七年一月十八日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

放生会

田村　満子　捌

高々と朱の鳥居や放生会　橘　文子
色なき風の渡る参道　式田　和子
月の客名札どほりに座をしめて　加藤　道子
何でも甜めて嬰はにっこり　田村　満子
公園のおすべり台で番を待ち　登坂　かりん
干菜吊せる竿のしなひぬ　和
背を丸くハーレーとばす革ジャンバー　文
ハワイの浜に女またせる　道
囁かる「わたしほんとは男なの」　文
お巡り人形古きまま立つ　和
皆願ふ通して欲しい破防法　道
とりあへずとてビール乾杯　和
玄関に守宮はりつき月皓々　ん
詩吟の稽古呼吸ととのへ　文
銭湯へよそゆきで行き盗まるる　ん
てごろな土産痩せる石鹸　道
鼻あげて象もたはむる飛花落花　和
先生囲み遠足の児等　文

あめ(ナオ)ごちの駅館川に舟を出し　ん
まほろばの山のぞむ城跡　文
バブル後は人が怖いと霊も言ひ　和
髪を洗へば前かうしろか　満
元結をぱちんと剪った日の涙　和
ジンクスいらぬ恋飽きやすし　文
血判状見せてどうだと迫る彼　ん
社会の窓の開いてゐる爺　同
慈善鍋ぽんとほり込む三千円　道
池袋から立教へ月　ん
ホリデーにコンダクターゆく鰻簗　道
掌にころがしてひょんの実を吹く　文
剽(ナウ)軽な里の案山子は夢の中　和
ブランド志向雀集る　道
坂下のカステラの店絵看板　文
柄杓で割りし甕の薄氷　道
観音像仰ぐ光背花万朶　満
治憲公の奨む養蚕　ん

平成七年十月四日　首尾
於　鎌倉おうめ様

山峡の霧

豊田　好敏　捌

山峡の霧に虹みる果報かな　豊田好敏

葡萄畑にかかる夕月　松本碧

今年酒交はす杯果てもなし　中川哲

机に散らす校正の反古　椿紀子

ピーピーと携帯電話かしましく　鈴木美奈子

ラッシュアワーに着膨れのひと　梅田利子

絵屏風に蹴鞠の図柄優雅にて　佐古英子

八幡様の宮司仲人　蒲原志げ子

悪いことしても許せるいい男　英哲

駅前旅館煎茶でがらし　利志

置き薬柳行李に詰め込んで　奈

金魚掬ひにはしゃぐ子供ら　倉本路子

月涼し都庁舎いまだ灯のともり　哲

名人戦の棋譜に挑戦　紀

紅絹裏のちらりこぼるるみやつくち　哲

そっと肩から義兄さまと言ひ　紀

花筏くるりくるりと世は無情　哲

鳥も魚も卵抱く頃　紀

春（ナオ）スキーリフトに歌ふ若き声　志英

スピード違反またも罰金　英敏

のっぺらぼーどこが鼻やらお臍やら　碧敏

揉んで叩いて鉋かけやる　坂本孝子

風呂上りアダルトビデオ誘ふまま　式田和子

チーズに似たる栗の花の香　哲英

新発意の読経しみじみ胸を打ち　碧

長野五輪で儲けそこねし　紀

数キロの遠く見通すマサイ族　利

立方根が解けるパソコン　和哲

生涯の心に残る月いくつ　孝

はいしどうどう秋の階　奈

ソムリエ（ナウ）の薦めるワインシャンピニオン　英

ロシヤのキャビア闇にごっそり　敏

束の間の円安に沸く兜町　路

文豪の詩を朗々と読む

人形を遣ふ太夫に花万朶

羽音かそけく飛べる姫虻

平成七年九月一日　首尾

於　山形県　新庄国民保養センター

風薫る

梓庵に栄ある立机風薫る
　新緑映る石橋の下
三角の粽結ふ紐堅うして
　玄関先に誰やらの声
校了の昼月仰ぐ小説家
　仕立卸の秋袷着る
気(ウ)がつけば時代祭の渦のなか
　雄に囲まれ恍惚の雌
南国の人なき浜に抱き合ひ
　シシカバブには辛口アブサン
止り際賽を投込むルーレット
　凍月隠す雲の小走り
音立てぬ西陣織場かじけ猫
　次期の総理と呼ばれ背伸ばす
代行で急場しのぎの監督に
　トラさんなんかめぢゃないよ俺
町内会カラオケつきの花見バス
　河原鶸飛ぶ豆州大仁

文音

本屋良子
中川　哲

鐘（ナオ）供養山伏姿借衣裳
直立不動の記念撮影
移動用トイレ行列時間切れ
白い碁石が盤上に散り
いたづらな鼠男の笑ひ声
「恋人募集」の紙が背中に
花火果つ闇路に腰のしなやかさ
土用の灸の効果てきめん
孫連れて熱田の宮へ月詣り
ベレー帽からちらと白髪
盗み酒味ひとしほか嫦娥殿
よまき胡瓜の出来は上々
猪（ナウ）弇を覗けばなにか蠢きて
親子三代茶の間賑はふ
恩師の書「夏炉冬扇」の横額が
地図を枕に早春の夢
桜守るひとの心の奥深く
かすかな唸りあげて姫虻

平成七年五月十七日　起首
平成七年十月二十日　満尾

哲子

額咲くや

中島　啓世　捌

額咲くや手児奈に似たるひとよぎる　中島啓世
さざ波涼し汐入りの池　八角澄子
夏座敷縁ひろびろと磨かれて　東明雅
馴れぬワープロぽつぽつと打つ　神谷安子
月皓く無事に終りし幹事役　久保田庸子
芋煮の会は故郷の村　雅
鵲(ウ)鴒を追うて二匹の犬が駆け　安
誘ひの電話親がすぐ出る　庸
鼻ぺちゃのくせに瞳がぱっちりと　雅
金のマニキュア銀のペディキュア　安
暗き堂修復終へし飛鳥仏　澄
色即是空いつの頃より　雅
麩饅頭寝酒のあとの寒の月　同
コレステロール注意する冬　庸
夢持てとエステ通ひを勧められ　安
人形時計ごあいさつする　啓
爛漫の花の中なる岡崎城　安
春田をかへす農夫をちこち　澄

ドーヴァー（ナオ）のトンネルぬけて復活祭　雅
カルティエラタンに埋む生涯　同
宰相の売ったは長い眉ばかり　安
原爆実験やはりやるとか　澄
日本中芥の山に塵の海　雅
毒（ポアソン）の香が身に迫りくる　啓
どうやってキッスしませうノッペラポウ　安
紅涙潸潸鬼哭啾啾　啓
雲晴れて月影映す潦　澄
トランプ遊び夜長灯して　庸
藍瓶にまとふ溢れ蚊そのままに　庸
少年剣士竹刀かついで　同
福（ナウ）送るつもりの河豚を貫ひたる　安
きんとんづくしごまめかずのこ　同
とび入りのヴィオラを合せクァルテット　澄
卒業祝ひに紺のスーツを　同
読みふける「天の夕顔」花吹雪　庸
昭和も遠しおぼろなる鐘　啓

平成七年六月二十一日　首尾
於　源心庵

冬鷗

見る度に海ふくらみぬ冬鷗　市野沢弘子
雪催して揺るる風垣　椿紀子
ざぼんむく指先の黄に染まるらん　橘文子
三校のゲラインク匂ひぬ　高橋豊美
一人来てまたひとり来て月いづる　緒方健
はたと鈴虫途絶ゆ薄闇　浅賀淑代
新綿を秤にかける過疎の村　りゥ
ねるとんパーティ流行るこの頃　弘
あの彼のアクの強さも魅力にて　文
弁天様の嫉妬用心　代
蓮の葉重なり生へる池の宿　紀
風船虫の紙を抱く月　豊
語りたる夢それぞれに被災の子　代
蔦の小頭ラッパズボンで　紀
自販機のカップの酒が良く売れし　弘
鐙坂まで地下鉄でゆく　紀
「御明算」塾長の声花の窓　代
めかる蛙がお目々借ります　文

中田あかり　捌

春(ナオ)の風邪薬に心地あやつられ　豊

銅羅打って呼ぶ夕食の刻　紀

ボースンの刺青人魚尾をはねて　同

ルカ書に言へる幸をなぞらひ　代

持たざるは墓地に借金智恵袋　弘

暖炉を囲みいつか夜の更け　代

ルージュ濃き受口キスを待ちてをり　健

小町といふ名そぞろ哀れに　代

痩せ猫のひらりと越ゆる煉瓦塀　豊

油麻(ナマ)地区に並ぶ占ひ　文

名月の隅なきを見る屋台越し　代

秋狂言に偲ぶ故郷　紀

品評(ナウ)会鉈割南瓜優秀賞　紀

記念写真の笑みの晴やか　文

矍鑠と陸軍中尉生き残り　弘

凧糸の張りしかと確かむ　紀

花吹雪御朱印倉に案内され　健

遠山目指し馳ける若駒　文

平成七年一月二十七日　首尾　り

於　新宿滝沢　水交会　豊

花の庭

萩原てる子　捌

集ふ人みな艶やかに花の庭　豊田好敏
　梢とび交ひてつづく囀　萩原てる子
焼栄螺窓より匂ひ流るらん　蒲原志げ子
　なれぬしぐさであやす背の嬰　橘文子
月追へば段々遠く街灯り　加藤道子
　自転車かしげかこつやや寒　文げ
菊の酒蒔絵の盃の六歌仙
　土蔵の二階しのび逢ひたる　文げ
さりげなく義母の視線を躱せしも　敏道
　サリン何やらとんと解らぬ　敏道
ヘッドギア神のお告げはロシア迄　げ
　原生林抜け広き湖　道
夏館月光蒼く燦めきて　文
　浴衣の裾のよれる憐れさ　敏
砂かぶり親方叱咤負相撲　げ
　駄じゃれが好きで占ひが好き　文る
走り根を継ぎて若やぐ滝桜
　牛虻うなる村の別され　道

酢(ナオ)茎売り大原女姿木屋町に　げ
　お閻魔さまに上げる盛塩　る
奈落まですってんころりアルバイト　道
　ギブミーマネーこれもビジネス　げ
そのかみはひと助けたる阿片なり　文
　吹雪止んだらとばす飛行機　道
寒昴師とも愛人ともいはばいへ　敏
　ウォーターベッド閨にきしまず　同
介護士の制服の襟きっちりと　文
　戦火もくぐる大和なでしこ　道
イデオロギー中東分ける望の月　げ
　オリーヴの実で無香ローション　敏
しこ鰯己(ナウ)が越し方噛みしめつ　敏
　散骨業に予約殺到　る
船旅は港港でショッピング　敏
　アンデルセンの英語版読み　同
花の山十日ばかりの賑はひに　文
　遠鐘幽か惜しみたる春　道

平成七年四月五日　首尾
於　鎌倉おうめ様

藤房の

あえかなる藤房の香や亀の池　橋野代々子
弥生尽とぞ渡る丸橋　蒲原志げ子
胡麻入りの振りかけ和布おもたせに　田村満子
椅子に縋りて背伸びする嬰　橘文子
監督のシートノックに月上る　豊田好敏
新酒の小瓶購へる自販機　文げ
杖並ぶ満願の寺秋遍路（ウ）　文げ
痩せた男に惚れて窶れる　文げ
美女創る整形外科医ワンパターン　敏文
能登はとりわけ暮し良い土地　敏文
原発を抱きし海の静かなり　満文
Xデーをマスコミが待つ　文敏
自堕落にソフトクリーム甜める月　敏文
夜逃げは竹の皮脱ぐがごと　文敏
髭おやぢ演じ続けて四十年　敏げ
帝政ロシア呪ふ宝石　げ満
花の下何埋もるや森の奥
雛流せば少し沈みぬ

橋野代々子　捌

春暖炉（ナオ）ファミリー集ふコンサート　同
前衛絵画見方それぞれ　文
天の邪鬼売り物にして世渡りす　満
王将戦に賭けた生涯　げ
河豚汁微毒に舌の縺れをり　敏
初夢にみる紅の唇　げ
不倫でも灼かれるやうな恋の道　満
孫まで捨てて「来たわ爺さま」　げ
裏山の窯で精出す壷造り　文
烏ばかりの増えるこの頃　げ
カーナビと望の月とに扶けられ　満
上着羽織れど何か薄寒　代
文化祭（ナウ）叙勲の沙汰に友来る　敏
ピント外れて犬がまん中　文
ホームレス西郷どんを塒にし　敏
Jで始まる略語さまざま　満
てのひらを差し延べて受く花ふぶき　代
籬に添ひて追ひかける蝶　満

平成七年五月三日　首尾
於　鎌倉おうめ様

初空や

八角　澄子　捌

初空やほのかに白き沖つ波　八角澄子
　淑気満ちたる苫の粗屋根　瀧川雅代
大樽に壬生菜ぎっしり漬けこみて　下坂元子
　ふらここを漕ぐ子らの声する　山崎一恵
月渚む地蟲は穴を出づるらん　梅田利子
　丸テーブルに詩集一冊　恵
若先生晴れてドクトル（ウ）メディチーネ　代
　すずやかな瞳の小走りに寄る　利
恋占は凶といでしが気にもせず　元
　蟾（ひき）のっそりと閻魔堂裏　同
田植唄太郎と次郎掛合ひに　代
　ロータリークラブジャパン代表　恵
黒塗りのリンカーン月の高速路　元
　これさへあれば鰯（はらご）の飯　利
二科展にわきめもふらず精励す　代
　鬱といふのが口癖の人　恵
花盛る山ふところに義民の碑　代
　雲雀鳴きつつ高くのぼれり　恵

ギャロップ(ナオ)で颯爽と行く東風の中　元
王位放棄が囁かれをり　代
右翼とは狂気ともなる紙ひと重　利
金平糖につぶつぶの角　代
短日の川越街道賑はひて　利
褞袍どっかり地酒ひきよせ　同
たくましき腕さすりつつアイラブユー　恵
間違ひ電話でくどかれてゐる　代
高利息うちだけですと勧誘員　恵
ぬらりひょん出て腰抜かす婆　元
都をば貫く川の水澄める　代
時代祭も済んで夕月　元
行く(ナウ)秋の広き畳に旅装とく　利
軽く吠えつつ騒ぐ犬達　元
タクト振る朝比奈隆老知らず　同
指定席あり春の茶房に　利
濠に添ひ花馥郁と勾ひ立ち　澄
誰にあげよか蝌蚪のお土産　恵

平成七年一月八日　首尾
於　山王　山崎邸

夏椿

東　郁子　捌

閑もれる数寄屋造りや夏椿　東　郁子
千々に砕くる滝の白糸　加藤　道子
ほの甘きワインゼリーに匙添へて　副島　久美子
譜面見ながらギター爪弾く　桑原　美津
山の宿子らも一緒に月を待つ　中川　哲
夜寒の庭に紛れ込む猿　若尾　よしえ
芸術祭賞取りそこねかこつ人　哲
母性本能またもむくむく　久
ひとまはり若き男をリードして　え
キャロットジュース健康によし　久
詐欺まがひお布施お布施とふんだくり　同
青木ケ原の樹海果なく　道
寒月に馬橇の鈴の冴えわたる　津
バターで焼きし旨き蕎麦掻　同
旅好きは穴場探しの名人で　久
詩集一冊懐にせる　哲
花筏ふたつに分けて家鴨行く　久
天秤担ぎ春泥の径　道

取り寄せし銘柄米の種浸す　同
国際相場電子メールで　哲
それぞれに思惑ふくむ両首脳　道
扇で頭叩く落語家　哲
紙切りの速いが自慢傘お化け　津
越後越中雪囲ひして　え
好奇心常に旺盛爺と婆　久
お茶にかこつけ猪突猛進　え
恋敵菊の枕を送りつけ　え
五色ケ浜の波に散る月　道
高体連挑む選手の神詣　え
ラップ音楽口ずさみつつ　津
モンゴルに捕虜の哀史の半世紀　道
夢を托され放たれし鳩　同
二升酒肝臓さらに強くなり　哲
田楽の味少し辛めに　同
みそなはす魚籃観音花万朶　津
指されし方に仰ぐ初虹　郁
え

平成七年六月二十一日　首尾
於　源心庵

水のうへ

百武　冬乃　捌

かそけしや早苗の影も水のうへ　百武冬乃
翅やはらかに生るる蜻蛉　長崎和代
活造り藍の小皿にとり分けて　副島久美子
「ただいま」の声はづむ幼ら　山崎一恵
どの窓も灯ともす団地十三夜　梅田利子
芸術祭のポスターを貼る　恵久
マイカー（ウ）で景色愛でゆく秋遍路　利久
まなざし遠き龍馬像立ち　代利
潮騒を聞きて契りしほつれ髪　代久
総合職で変へぬ旧姓　代久
来年のオペラS席リザーヴし　久代
お座敷犬はリボンいっぱい　恵久
月中天雪吊りの形くっきりと　利恵
政変胎動春を待ちつつ　代利
聴牌（テンパイ）へまづは一服吹き上げる　利代
にんにく匂ふ出前ラーメン　久利
花時の相撲興行ファンの群　利久
あの手この手で済ます納税　利

囀(ナオ)りの絶えぬ丘辺に草を藉き　恵
遺跡の石は渦の文様　同
ＵＦＯを信じる叔父の真面目顔　久
算盤づくで村起しする　利
「大清水」ごとりと自動販売機　同
ベジタリアンがまたも夏痩せ　恵
アルマーニくづして着てる憎らしさ　同
胸のくぼみを焦がすくちづけ　代
浮気沙汰尽して夫婦還暦に　久
陶の狸の空仰ぎけり　利
薩摩琵琶平家を語る宵の月　代
外人記者の眼鏡露けく　久
赤(ナウ)い羽根つけ汲み交す地下酒場　代
防災グッズ積みしキオスク　久
職探し先送りして大学院　利
般若心経いつもつぶやき　代
あさぼらけ夢のごとくに花の散る　乃
ただほのぼのと霞む山なみ　恵

平成七年六月三十日　首尾
於　池袋　滝沢

山滴る

文音

佛渕健悟
河野玄麿

山滴る中を僧衣のうたぐるひ
　冷し麦茶に合掌の礼
アーケード鸚鵡の籠を店先に
　太り気味なる猫も仲よし
ゆらゆらと満月揺るる船溜り
　秋愛ほしむ焼き杉の下駄
対決を前にちちろの声清し
　ガンか剣かコイン投げ上げ
サーカスの一座に白痴美の女
　透きとほりたる羽衣を干す
暴れ川鎮めて村の深眠り
　工事奉行の名を残す沼
吟行の連れの相槌みな同じ
　寒さ泳へて浴びる月光
しもやけの弟が吹くコルネット
　サンフレッチェよVのサインを
くどくなる酒取り上げし花むしろ
　吉の御神籤春の気配も

薬(ナオ)玉のひとつ割られて磯開き
　環境浄化アイデアに沸く
後進地人口政策普及せず
　豚の食へない村を抜けきて
柳腰満漢全席白昼夢
　脳中枢に媚薬きらめく
冷房は嫌ひだけどと言ひながら
　家具の配置を変へるのが趣味
けふはけふあしたはあすの風がふき
　雀鬼に合はぬ短めの指
健やかな半月覆ふマニキュアー
　講習会で鰯料理を
文(ナウ)化祭へたな俳画も賑はひに
　ハワイ移民の苦難伝へて
故里に錦を飾ることもなく
　壷中に生をつむぐまたよし
花万朶胡蝶の舞の軽やかさ
　思ひがけなく街の初虹

平成七年六月二十日　起首
平成七年十二月二十三日　満尾

磨
悟

金木犀

村田　冨美　捌

掃く肩に金木犀のなほも散り　村田冨美
池にゆらげる弓張の月　真田光子
虫籠をかこめる子等は本脇に　水鳥ますみ
ミニチュアカーは小遣ひを貯め　倉本路子
母作る弁当六つ包みたり　光路
列につづいて山清水掬む　光路
西日射す堅きベンチの無人駅　光路
もう戻れない胸を抱きつつ　みみ
夢違へ観音はわが恋ぼとけ　同
枝折戸の鍵はづす宗匠　光
停年後料理教室入れられて　みみ
いつもの飲み屋誘ひ合はせる　同
寒煙に月が吹かれる埋立地　路
大鷹の翔ぶ能登の荒海　光
深谷を渡る吊橋ゆらゆらと　同
パソコン通信国境を越え　みみ
金泥に又造描く花万朶　路
からす揚羽の影のよぎりぬ　美

長生(ナオ)きのめでたさ半ば雛祭　　み
健康食の宅配もあり　　光
ジーンズに流行りの小さきリュック背負ひ　　路
北鎌倉の谷戸の細道　　光
亡霊の足が揃ひし薪能　　路
のど越しのよき冷酒の酔ひ　　光
新しい恋の始まる予感して　　路
街にノクターンひしと抱き合ふ　　光
一病の一期一会の印度行き　　み
痩せたる牛の涎地にひき　　路
望の夜ものきはやかに現はるる　　み
真赭の芒ぐいとひきよせ　　光
ムル(ナウ)ロアの魚に海の冷まじき　　路
円安円高基準あやふや　　同
小短冊巡りくるなり旅半ば　　光
詩嚢ふくらむ水温む頃　　み
花過ぎて安らぎのあり神の苑　　美
東踊へ招く絵てがみ　　路

平成七年十月十一日　首尾
於　角筈地域センター

力士の扇子

本屋　良子　捌

錦絵や力士の扇子はっけよい　端元　涼子
　手に汗にぎる大相撲なり　本屋　良子
岩つばめ峡の湯宿に眺めゐて　船渡　文子
　下校の鐘を鳴らす分校　竹内　昭子
月今宵国際電話掛けやらむ　瀬尾　千草
　残る蛍を垣に見送り　涼
陶甕に糸瓜の水を満さむと　良
　土産に貰ふ痩せる石鹸　文
レオタード熱き視線を背に受けて　昭
　ハッスルしてる取巻きのギャル　草
何もかも貴方ごのみの女となり　涼
　先づは味噌汁次に漬物　良
蟬の膏薬にほふ窓の月　文
　夢かうつつか雪坊主見る　昭
不死身なるウルトラマンの再登場　草
　切り絵細工に拍手喝采　涼
花吹雪あびて遊覧船の旅　良
　エッフェル塔はかぎろひの中　文

公園（ナオ）の風船売りと子供たち　昭
絵筆につける空の群青　草
聖堂のステンドグラスミサを聴く　文
癒ゆることなき戦争の傷　昭
失敗を取りなしくれる板場さん　涼
夜店ひやかす腰を抱き寄せ　良
さやうならいとも涼しき顔をして　草
ソファーの上に猫のうそぶく　文
被告には厳し敗訴の判決文　良
離れ小島に流さるる日よ　涼
月佗びし光源氏の仮住居　草
色なき風が噂とどける　昭
焼鳥（ナウ）が鶫であれば酒はグー　文
ゴルフ魚釣り趣味が昂じて　昭
早起きの日曜大工槌の音　涼
薄き氷の張りし蹲　良
天守閣うづみ残して花の山　昭
くわんのん尋ね春の近江路　草

平成七年七月六日　首尾
於　愛知県体育館

明神平

著莪咲いて集ふ明神平かな　八代　嫋
　ホテルの玻璃にとまる夏蝶　佛渕健悟
ブルーチーズスライスに黴匂ふらん　橘　文子
　呼べばすぐ寄る耳長き犬　権頭和弥
名月の石庭わたる風の音　太田けんのすけ
　千代紙貼りし小箱さはやか　浅賀淑代
門跡のゆるゆるとする冬仕度　悟
　若衆芝居をそっと見に行く　け
右頬に嫁のキッスのこそばゆき　子
　弱点欠点一人合点　弥
怪童と言はれた頃もありました　代
　淡路島から弓形の橋　弥
カラオケの果つれば氷柱照らす月　悟
　路面電車に着ぶくれて乗り　子
たはむれに酒ふくませるせつなさよ　悟
　誰にもみせぬ胸の文身　子
サーカスの来る街落花しきりなる　代
　朝餉はいつも蜂蜜のお茶　悟

八代　嫋　捌

どんたくに司祭のつくる茹卵　け
いっしょに走る身障の子等　弥
抛物線描き飛球は場外へ　代
星座に因みつける芸名　子
このところ少し含羞む父の風呂　弥
スクーリングは白靴を履き　悟
海沿ひにはだしの烏埒もなし　弥
伯爵夫人抱きとめる腕　子
秋灯下木版で読む金瓶梅　け
ここを先途と網代打つ月　弥
三浪の伜に送る橡団子　悟
アーミーナイフいつも携へ　代
モヒカンに刈ってインカの丘のぼる　子
短波放送早口で鳴り　悟
砂時計見つつ腹筋V字止め　代
凧の尻尾を持てる弟　け
人何を求めてゆくか花の旅　嫋
擬宝珠欄干なぞる春風　弥

平成七年五月十五日　首尾
於　箱根明神平

「動詞型」の

山口　美恵　捌

「動詞型」の人々集ひ御慶かな　豊田好敏
三日晴れたる蹲の庭　佐古英子
浮き魚礁見廻る度に様変へて　山口美恵
子の借りて来し猫のCD　松本碧
大屋根の甍しづまり月昇る　青木秀樹
熟れし通草の舌にとろりと　同
秋深(ウ)く汝が耳たぶも紅に　敏子
囁く言葉聞かぬふりして　碧
イスラムの原理怖しエアポート　樹
サハラ砂漠は昔海原　碧
夢に聞く交響曲は新世界　子
からまつ若葉水彩で描く　同
雨蛙月の光に濡れてをり　敏
薄い珈琲所望するひと　樹
胃カメラを呑みこみがたきこのところ　敏
雀ちゅんちゅん鳩のくうくう　碧
東山栄枯盛衰花ぞ知る　敏
雛流しの婆と曽孫

到来(ナオ)の海雲で勧む吟醸酒　子
自慢の器さり気なく出し　同
昨日今日地震つづきたる列島に　樹
改憲論議いつか薄れて　敏
故郷に帰る標の冬至梅　子
シルバーシートで若者の恋　碧
いやならば帰っていいとすねて見せ　樹
邪鬼を踏まへる四天大王　同
月光に毛脛の壁蝨(だに)をひねってる　敏
敬老の日はいつも赤シャツ　樹
幸せは木犀の香の満つる街　恵
出生率のやっと上向く　碧
「死ぬまでになすべきこと」(ナウ)を何もせず　同
衛星放送ただで見てゐる　樹
骨太で楷書の似合ふ文科系　碧
春場所迎へ幕下となり　同
朝帰りふとためらはす花朧　恵
所せましと巣立ちゆく鳥　子

平成七年一月三日　首尾
於　中村橋　佐古邸

◇源　心◇

三の酉

梅田　利子　捌

三の酉残りの福を買ひにけり　梅田利子

笑ひまじりに冴ゆる人声　今宮水壷

雑木山炭焼く男籠りゐて　坂本孝子

ヘリコプターで運ぶ食料　染谷佳之子

広角（ウ）のレンズ構へる月涼し　橘文子

獲物をねらふ梁の蜘蛛の巣　佐古英子

武士（もののふ）を慕ふはいつも命がけ　孝英

息子を奪ふ女遠ざく　壷之

髭面の司法試験も十年目　文孝

浮雲みたい中華饅頭　壷孝

銅羅打ちて巡航船の入港す

猫を撫でては唄ふブルース

ぽっちりと一粒頬に花の雨

椿紅濃く泛ぶ蹲踞

スプリングコートを脱いでシャンゼリゼ　英
○を描いてこれ禅といふ　壷
国会は問答無用横行し　文
金で口説いてがんじがらめに　英
忍び逢ふ為のかつらの数いくつ　之
下戸が無理して酔うて候　壷
逝きし児のテディベアーを捨てかねて　之
旅の二人に黒姫の月　孝
秋狂言留学生の脛毛濃く　文
新米炊いてパンはおあづけ　英
パソコンのニューソフト売る列に付き　文
成層圏まで汚す人類　之
座布団に源心庵の花と夢　利
「ほら、ごらんよ」と指せる蝶々　孝

平成七年十一月二十九日　首尾
於　源心庵

返り花

上月　淳子　捌

月光にほのと浮びぬ返り花　上月淳子
蒟蒻すだれ揺るる軒先　下鉢清子
エレクトーンおさらひの音の聞え来て　倉本路子
チーズたっぷり宅配のピザ　長崎和代
いつ(ウ)からか毒蜘蛛街に拡がりぬ　松本碧
葵祭は父の生き甲斐　豊田好敏
あの娘の名心の中で呼び捨てに　路
シャイな婿さん仕切るわたくし　代
下町のお店(たな)繁昌倉が建ち　碧
のっぺらぼうに屠蘇をふるまひ　清
学会を終へて始まる無礼講　敏
廃刊されし俳誌復活　同
桃咲いて桃に埋もるる桃の村　路
春の炬燵に猫を抱き上げ　清

イースター帽子のリボン替へもして　代

ハイドパークを散策の人　碧

曳く杖も手にもてあますほどの老い　清

島に泣いてる俊寛の霊　敏

「ほのほのほ」「秋田小町」に「ひとめぼれ」　路

制服脱げばちょっとセクシー　清

逢引は女滝男滝のしぶき浴び　代

下駄に灸すゑ癒す眼病　敏

十三夜移り激しき世を生きて　路

紅葉前線降る里山　碧

威銃追はれ上手の群雀　清

オフレコと云ふ本音うっかり　淳

爛漫の花の向うの橋渡る　清

磯遊びの子見せに来る貝　代

平成七年十一月二十九日　首尾

於　源心庵

爽涼や

神谷　安子　捌

爽涼や句集「水の香」賜りぬ　神谷安子
硯洗ひて座右の文台　梅田利子
観覧車月光浴びつ昇るらん　雑賀　遊
ポテトフライにミルクコーヒー　篠原達子
ジャケットの最新モードパリ仕込み　遊
聖名祭の美しき娘等　利
抱きしめ長き睫にくちづけす　遊
笛吹きケトルちょうど鳴り出し　達
磨硝子狸御殿の永田町　遊
ぬるき麦酒の泡ばかり注ぎ　利
もう少し行って洗剤安く買ひ　達
学習塾のふえる効外　同
「サクラサク」受けてうれしき花の朝　利
「ちょっと来い」てふ小綬鶏を聞く　同

逝(ナオ)く春の手児奈の里を尋めゆける　達

鬼門除け札貼れる厠辺　遊

新弟子の馴れぬ庖丁ちゃんこ鍋　利

日にち薬で歎き薄らぎ　遊

自動ピアノソナチネ高く奏でをり　同

不倫深まる愛の密室　同

三十年妻の稼ぎで養はれ　利

浮いて沈んで孑孑の月　同

賑やかな宵のひととき同窓会　達

古きポルシェと記念撮影　安

ビジネスマン(ナウ)アタッシュケースに漫画入れ　遊

獏の真似して夢食べる人　達

花万朶会津五桜滝桜　遊

山から山へかかる初虹　安

平成七年八月三十日　首尾　達

於　源心庵

朝霧や

副島久美子　捌

朝霧や屋根累々と紫禁城　副島久美子
帰る燕のよぎる残月　桑原美津
実山椒香りゆたかに炊き上げて　百武冬乃
テレビの録画スイッチをＯＮ　篠原達子
吾(ウ)も妻も端居なりけり相寄らず　木村真呂
嘘ひとつ無き恋の涼しさ　松本碧
日本晴峠気味よき風の音　峯田政志
駅伝選手応援の旗　津
宮様の座られし椅子掛けてみる　達
冬籠りする門跡の寺　呂
丑みつ刻あたり窺ふ垢舐鬼　碧
灸の温み腰にほっかり　乃
花蓆ロックカラオケ隣り合ひ　達
休むことなく飛び廻る虻　志

聖木曜（ナオ）市場の果てし大広場　津
　掏摸がすられて元のもくあみ　呂
総裁戦思惑通り勝ち抜いて　乃
　ブラジルの地震津波空振り　津
凍月にバッファロウの影遠のきぬ　碧
　胼の手こすり農夫酌む酒　志
むずと抱く飯盛女声を上げ　達
　ふたりして見る枕絵草紙　達
いつしかに雨となりゐる窓涼し　呂
　現し世の夢宝くじ売れ　達
ドライバー（ナウ）元気じるしが古稀迎へ　碧
　国籍不明で決めるファッション　達
満開の花の大枝垣越しに　呂
　三つ四つ二つしゃぼん玉飛ぶ　久

平成七年十月十一日　首尾　志
於　池袋　滝沢

夜神楽の

原田　千町　捌

夜神楽の一番笑ひ崩しけり　原田千町

温石いだき坐る村人　中田あかり

前衛書青墨の線かすれゐて　遠藤央子

質問盛りの吾子と買ひ物　山崎一恵

ささやかに暮らす窓辺の月さやか　久保田庸子

綾に綴ぢたる新絹の艶　村田冨美央

初臘の君を見送る投げキッス　恵

宮殿雀恋の取り沙汰　り

香港に返還迫る再来年　庸

忘れた頃にマラリヤが出る　美

武勇伝自慢の話次々と　町

呑み口きりり枡につらつら　り

そよ風に乱れし花の紅枝垂　美

春惜しみつつ記念撮影

鳴(ナオ)く蛙小便小僧着せ替へて　り

L特急の走る山裾　庸

水増しの伝票そっと差し出され　恵

重量挙げに優勝の栄　央

阿弥陀仏狂ふ教団見そなはし　恵

チャドル脱がせて熱き抱擁　庸

大のつく画家に作家に秘画秘文　町

扉にすがる空蝉の月　恵

散歩道かつて知ったる犬まかせ　央

禿頭会の皆んな矍鑠　り

思(ナウ)ひ出は胸それぞれに去年今年　恵

凪ぎたる海に投げる釣り糸　庸

ブロンズの龍馬は花の吹雪浴び　町

弥生の野辺に若者の夢　美

平成七年十一月二十九日　首尾

於　源心庵

◇二十韻◇

切子碗

両吟

秋元正江
東明雅

切子碗ふところにある驟雨かな
　旅も半ばの雛罌粟の宿
詩人（うたびと）のやうやく揃ふころならん
　黄昏そめし山の湖

観（ウ）光の馬車に客なく月渡る
　湯呑みで呷るどぶろくの味
着くづれて膝の辺りの秋袷
　御寮人はんの甘き香よ
太棹の三味の音響く何処より
　大漁船に港賑ふ

就職（ナオ）の氷河時代も上の空
核反対のグループに入る
テロリストその反面のフェミニスト
髪かきあぐるしぐさしなやか
月寒し猫の化けたる美女の伽
音をたてずに廊をあゆめる

聖（ナウ）観音慈悲の眼を半眼に
若草萌ゆる大宇陀の町
花影を行くは額田女王か
揺らぐ海市の絵てがみを書く

平成七年八月一日　起首
平成七年九月十八日　満尾

執筆　雅江

鰯雲　猪子春治　捌

ひとり旅ふと思ひ立つ鰯雲　猪子春治

粧ふ山に懸る昼月　山田歌子

ひょんの実を鳴らす子供の部屋にゐて　杉山壽子

退屈しのぎ電話帳繰る　武村利子

棟方の女人菩薩の補修され　宮川侊子

身にまとひつく彼のまなざし　長谷川芳子

制服の第二ボタンをまたつける　田部みどり

鷺を烏と言ひくるめをり　織田康子

みそ味のたっぷり効いたおでん鍋　壽

昔ばなしは祖母の楽しみ　り

村(ナオ)おこし湖に恐竜棲むと言ふ　歌
官官接待酌みつ酌まれつ　り
いと美しきミスターレディーにときめきぬ　壽
目覚時計狂ひ癖つく　利
坪庭の月に濡れてる宵涼し　芳
しめ切り原稿追ひ込みに入る　康

塗(ナウ)りたてのコンクリートへ踏みはづす　侊
薬局開店くばる風船　利
花に逢ふための日程表もらひ　侊
たんぽぽ揺れる畑の畔径　康

平成七年十月二十五日　首尾
於　名古屋住友クラブ

夏の萩

岡本道子　捌

枝折戸に人の気配や夏の萩　岡本道子

心弾める初蝉の声　加藤治子

辞書一つ増えれば重き鞄にて　谷本守枝

エアーポートに定期便着く　繁原敏女

月今宵披露の宴のささやかに　枝

渋や甘やの山柿の恋　間瀬芙美

行く秋のあんたあたしの何なのよ　矢崎藍

ミニ政党の犇めきて立つ　福井直子

騙し絵の展覧会の面白さ　女

帽子あみだに煙草燻らす　枝

凍結（ナオ）のアウトバーンを疾走し　道

ワインケラーに燃ゆるストーブ　枝

冬満月投げ上げし如海の上　女

婆と孫とが出任せの唄　治

それとなく昔の女のことを問う　枝

同じ宿命の髪の乱れに　女

迷（ナウ）い入る山の細道岩仏　治

猫も朝寝の広き縁側　直

故郷の同窓会は花の下　治

遠く小さく春日傘ゆく　直

平成七年七月十七日　首尾

於　豊田産業文化センター

漱石忌

老齢の猫かくしゃくと漱石忌　秋元正江

冬あたたかき硝子戸の部屋　佛渕健悟

人ごみに知る人もなく流されて　古賀一郎

回転木馬落着かぬ尻　青木泉子

五味蓉子　捌

月中天長考つづく盤の上[ウ]　五味蓉子

妻を質屋に遣りしやや寒　悟

種茄子ころがってゐる畑の畝　江

マディソン郡の橋は渡らず　郎

神童の落ちゆく先は鸚鵡郷　同

近況報告ＦＡＸで受け　泉

噴(ナオ)き上げる油井を前のハンモック　悟

葡萄酒にくる蟻と昼月　同

竹針の擦る音恋し蓄音機　江

何故かしびれる女医のまなざし　悟

鏡中の鬼は妬心に炎立ち　蓉

大俎のわきの塩壷　泉

本(ナウ)陣の柱に彫りし青春賦　悟

風光る野に嬰児を追ふ　郎

花の山余韻のながき時の鐘　蓉

パラボラアンテナ越ゆる蝶々　泉

平成七年十二月九日　首尾

於　新宿勤労福祉会館

牡丹かな

坂本孝子

繚乱の夢にも匂ふ牡丹かな
　緑仄かに淹るる走り茶
捕虫網野を縦横に遊ぶらん
　風にジーンズ乾く裏庭

文音

米谷貞子

月光を支へて窓のやじろべゑ
　樽にびっしり詰める渋柿
賛美歌も土地の訛よ秋深む
　流され人を慕ふ島の娘
包丁の切り傷疼く片想ひ
　羽子板市の賑ひの中

お帳場に声のとび交ふ雪しぐれ

母は傘寿をかるがると越え

アステアのタップダンスも懐かしく

口歪むなり葉巻噛むとき

流し目のもの悲しくてわいせつで

女王の鞭にじゃれる黒豹

壁掛はゴブラン織のロココ調

春愁癒えて甘き葡萄酒

花に酔ひ月に詠ひて京泊り

谷の瀬音をのぼる若鮎

平成七年五月六日　起首

平成七年八月二十九日　満尾

貞孝

秦野

権頭　和弥　捌

降り立ちし秦野の鉄路灼けてをり　権頭和弥

襟をゆるめて入るる涼風　倉本路子

本丸は西に高嶺の望まれて　近藤蕉肝

青磁の碗にお薄すすめる　橘　文子

月仰ぐ出湯の宴賑やかに　松本碧肝

夜長の文を送るファックス

火祭の火の粉浴びては好き好きと　路

ひそと置かれし鍵と口紅　文

民主化に命かけたる父娘　肝

かの古参兵今は何処に　路

雪合羽（ナオ）そのままに来て大胡坐　碧

狸のっそり月の庭先　路

三冠王かてて加へて盗塁も　肝

吉凶占ひネーミングから　文

ドンホセのシャツの釦を毟り取る　弥

抱けば鬼女は水になるてふ　路

「無」（ナウ）と刻む墓に眠りて海の音　文

確定申告しない気易さ　碧

訪ねきし庵に花の散りかかる　肝

春若だいこけふが蒔き頃　文

※だいこ……大根

平成七年八月二日　首尾

於　鶴巻温泉　大和旅館

秋の渚

風ははや秋の匂ひの渚かな　雑賀　遊
夕蜩にのぼりくる月　篠原達子
カンヴァスに実石榴の色移しゐて　百武冬乃
コーラスの譜を送るファックス　松本碧

雑賀遊捌

猛犬（ウ）の札出し女猫と住む　達
やんごとのなき血筋舞姫　碧
古信楽無釉焼締め野趣に富み　遊
紅毛牧師茶の湯教へる　乃
寒の雨つぼにぴたりとエレキバン　同
襖の影に座敷わらしが　碧

遠汽笛休日運転機関助手　達
魅力いや増す午後五時の髭　乃
不倫とは快楽のこととみつけたり　遊
四万時間来世紀まで　同
月涼し河西回廊渺々と　乃
発掘現場蚊遣香提げ　達

老教授酔へばいつものモーツァルト　同
ハッピーイエロー春のスカーフ　遊
花霞山の麓に棚引きて　碧
小さな地蔵囀の中　同

平成七年八月二十一日　首尾
於　淡路町

檀紅葉

佐古英子

いち早く檀紅葉や高清水
仕込み上々新酒蔵出

豊田好敏

月天心細道小道小走りに
犬の散歩はいつも子の役

鈴木茂

東明雅

潮騒の聞こゆ苫屋に生れしとか
襦袢はだけて鏡台の前

敏
子

ぬめぬめと男とろかす蛇の肌
高原列車夏野ゆるやか

雅
茂

修道尼バタークッキー焼きあげて
巡査部長がさっと敬礼

子
敏

膝送り

核兵器廃絶叫ぶ国数多（ナオ）　茂

鮪を追うて過ぎし一生　雅

不倫でも己が初恋月凍る　敏

抱けば互ひの胸の高鳴り　子

長谷寺に近き正行夢の跡　雅

グランドパパは今も健在　茂

フォワグラ（ナウ）をクリストフルの皿に盛り　子

三々手拍子売れる雛市　敏

闊歩する優勝力士花吹雪　雅

太陽めがけとどけ風船　茂

平成七年十月十九日　首尾

於　電通南寮

須田智恵氏句集出版を祝す

水の香

高瀬　美保　捌

十六夜や水の香のあり亡夫恋　高瀬美保

新走り酌み偲ぶ面影　須田智恵

大廊下ガラスの色に秋立ちて　椿　紀子

ぼんぼん時計ゆっくりと鳴る　内田麻子

にぎり飯食べながら観る草野球　今村すま子

焚火当番何時も弟　五味蓉子

寒雀ぱっと飛びたつ不動尊　庄司美代子

宰相争ひ桂馬角落ち　麻

理科室で骨格標本組立てる　紀

初運針の針目よろよろ　美

マザコン(ナオ)の系譜めんめんオイディプス　蓉

パソコン入力見合ひナンバー　同

三度目は夫婦別姓幼な妻　す

夕焼の海白帆傾く　恵

犬の仔が月割って飲む盥の湯　す

やぶ北ぐり茶お茶に凝ってる　麻

勲章(ナウ)は母の笑顔と共に老い　紀

蝶の道追ひ風の道追ふ　保

アルプスの雪を仰ぎて花の郷　恵

佐保姫の衣うすきくれなゐ　美

平成七年九月十一日　首尾

於　梶ケ谷房連庵

辛夷咲く

高橋　豊美　捌

悼 佐藤正昭さん
少年の面差し遺し辛夷咲く　秋元正江

分け入る山の寂として春　橘文子

雛納め持たせやるもの揃ふらん　五味蓉子

そばやで食べるカレー丼　太田けんのすけ

藍浴衣月夜の町をふたりして　高橋豊美

古き恋文原爆忌来る　蓉

軍籍簿欠けたるままに無恩給　け

ぷかりとひとつ煙吐き出す　文

ふと買ひし鍛冶丹精の出刃包丁　け

時計をふたつ枕頭に置き　同

北(ナオ)颪闇に領海犯す船　文

脱サラ果たし貂の養殖　同

スウィートテンダイヤ女にさりげなく　蓉

秋刀魚に檸檬しぼる指先　け

歌右衛門名残り狂言後の月　文

轍ひっそり霧雨の道　蓉

お(ナウ)題目あげて誓ひし禁酒解き　文

時間つぶしに猫の髭切る　蓉

もの思ひ落花しきりに高瀬川　同

連子格子の影のうららか　け

平成七年四月二十二日　首尾

於　大久保地域センター

西鶴忌

椿　紀子　捌

渋皮の剥けぬままなり西鶴忌　椿　紀子

忘れ絵扇文机のかげ　浅賀　淑代

月明りギター奏でるひとありて　緒方　健

空き缶に注ぐ薄いコーヒー　高橋　豊美

荒馬(ウ)の砦の間を走り抜け　代

現場監督一年の留守　美

幼子のアワワ聞かせるラヴコール　子

浴衣襟元こぼすふくらみ　健

風通るとらやの座敷青簾　美

下戸がしきりに相槌を打ち　代

新任(ナオ)の牧師のかける丸眼鏡　同

アパルトヘイトいまだ終らず　美

七人の小人が探すダイヤ鉱　代

咳に嘘に鼻水の月　健

角巻に顔を隠して温泉(ゆ)の宿へ　同

鳥が啼くわと女ささやく　代

年金(ナウ)を受取に行く万歩計　健

岩海苔えらぶ市の賑ひ　子

「普賢象」※国原めぐる夢の花　美

ふはりふはりと蒲公英の絮　健

平成七年十月十四日　首尾

於　大久保地域センター

※八重櫻の名

浜木綿

長坂　節子　捌

海までは浜木綿咲くや砂の道　月山　壹

跣足で駈ける街の子供等　小園　好

銀の匙とればカレーの香るらん　長坂節子

汽笛の響き遠く近くに　原　みね子

廃屋(ウ)の影くっきりと望の月　森　佳子

鬼灯ならし誰を待つやら　ね

稲架のかげ甘い秘めごとこれきりに　矢崎　藍

蝮の恐き長雨のあと　好

無党派は投票よそに別荘へ　佳

家格の匂ふ文豪の軸　壹

初場所（ナオ）の新大関のはれやかに　佳

猫を相手に熱燗を酌む　ね

今すぐに声聞きたいとくる電話　同

跡取り息子恋に狂ひて　壹

月涼し就職難も不景気も　藍

心の丈は追伸に読む　ね

老人（ナウ）に鳩が寄りくるバルセロナ　佳

旅で貰った春の風邪っ気　好

花越しに金の鯱あり誇りとす　ね

帰ろ帰ろと消ゆる陽炎　執筆

平成七年七月十八日　首尾

於　豊田産業文化センター

水ぬるむ

細川　研三　捌

清姫の渡りし川や水ぬるむ　式田和子

師はたをやかに桃芽吹く径　細川研三

釣釜でゆるり茶の香を楽しみて　武村利子

となりの犬の叱られてゐる　山田歌子

ビル街をシルエットにし冴ゆる月　森岡しげる

腕を組みゆく風花の中　加藤治子

このごろは年上女房何のその　本屋良子

捨てる神あり拾ふ神あり　宮川侊子

円高のニュース朝からかしましく　織田康子

道路工事に手旗振る男　高橋良風

子供（ナオ）らに草笛吹くを教へ居て　治

人生相談ちょっと聞いてよ　佐

五度六度後家さんばかり追ふ夫　る

敬老の日に恋文の束　康

月光に声朗々と白楽天　歌

菊の酒くむひとりしみじみ　利

形（ナウ）見にと叔母にもらひし博多帯　康

うからやからと共に旅して　長谷川　芳子

露天風呂肩に散りくる花吹雪　治

山のかなたに立ちし初虹　利

平成七年三月八日　首尾

於　名古屋住友クラブ

広重の橋

松本　碧　捌

広重の描く大橋望の月　松本　碧

饅頭笠が曳く秋の駒　式田恭子

菊膾客も亭主も上戸にて　高橋豊美

宅配便の判を探しぬ　式田和子

新車来るプレートナンバー語呂も良く　中川　凡

左パンチでチャンピオン取り　和

身ひとつで転がりこみし四畳半　凡

昼夜逆さの桃源郷なり　恭

はんぺんもつみれも鍋に煮込まれて　凡

初句会には多き挨拶　美

パリへ行くツァーこっそり円計算（ナオ）　和

手話で通じる恋は本物　恭

壷坂の寺にお里と沢市と　碧

楽屋天井女郎蜘蛛棲む　凡

月明り湯上りの児に天瓜粉　和

滑稽新聞踏んじゃだめだよ　美

思ひ出は古き兵舎の赤煉瓦（ナウ）　恭

鶯笛を吹くはなに人　凡

マイク持ちつぎつぎと立つ花吹雪　美

春でおぼろでご縁日です　和

平成七年九月十二日　首尾

於　渋谷連句教室

吹き抜くる風

峯田　政志　捌

吹き抜くる風に聞かばや秋の詩　峯田政志

新涼の月覗く藍甕　須田智恵

国体の壮行会の始まりて　篠原達子

友に贈らるラップCD　梅田利子

砂浜の砂で作りし裸婦の像　同

男に弱い性は変はらず　恵

お伽する衛兵夜毎新しく　達

シュガーたっぷりトルココーヒー　同

新聞の上をのろのろ冬の蝿　利

落葉踏みしめ急ぐ参禅　恵

ワンルーム（ナオ）マンション建つと噂たち　達

信金保証しませんと知事　利

飛行雲月待つ空を真二つに　恵

こんぴら神輿かつぐペディキュア　達

冷やし酒女の本音かくしつつ　恵

わけ知り顔の膝のとら猫　利

婆（ナウ）さまの頭痛明日は雨らしい　達

春の旅にとベレー誂え　志

大津絵の鬼も踊りぬ花の宴　利

比良を後ろに揚雲雀鳴く　恵

平成七年八月九日　首尾

於　池袋　滝沢

◊半歌仙◊

女礼者

浅賀　淑代　捌

夕映えを背にして女礼者かな　中田　あかり

きはやかにあり書初の文字　佛渕　健悟

合唱部パート練習きりもなし　八代　嫋

ふたつ一緒につまむドロップ　橘　文子

友待てば沓脱ぎ石に月の影　権頭　和弥

揺るるともなくゆるる越瓜　市野沢　弘子

宮相撲若き力士の不浄敗け　高橋　豊美

サロメチールの匂ひここまで　浅賀　淑代

元が幅利かせはじめる香港島　文

後足立ちて外を見る犬　悟

水鉄砲月をめがけるごとく突き　弘

笑ひ上戸の娼婦隠るる　悟

老いぬれば痴人の愛を地でゆきて　文

ふつふつたぎる南部鉄瓶　美

頂に伝令の旗法螺聞こえ　弥

葛苣の青饅芥子きかせむ　り

花筵うからやからの酔うて舞ふ　代

野を横ぎれる小綬鶏の群　嫋

平成七年一月十一日　首尾

於　新宿「宿六」

むら燕

稲葉　道子　捌

荷おろしの魚港賑はすむら燕　稲葉道子

貝寄せあげし浜の彩石　若尾よしえ

目借時せかさるる稿書き了えて　小野シズ

お盆にのせるチョコとボンボン　川澄みよ

有明の月を誘ふ丸太小屋　町田順風

蔓苔桃にすがる蜉蝣　越野文子

登高（ウ）の故事さながらに厄拂　え

ダイヤの指輪かくす古妻　文

湯あがりの艶めく肌に惚れなほし　ズ

裸ぐらしは心やすまる　よ

二千本安打決めたるホームラン　風

あっけらかんの落合選手　え

階段をのぼりつめれば寒の月　よ

尾をひいてゆく焼芋の声　ズ

固いもの噛んで呆けるの防ぎましょ　文

孫といっしょに犬のお散歩　よ

花の下大名行列しづしづと　え

お地蔵様にとまるてふてふ　風

平成七年四月十六日　首尾

於　梅丘会館

根深汁

活断層の上に住み古り根深汁　成瀬貞子
寒の雨降る崩壊の街　川治敦子
念願のエレキバンドを結成し　本屋良子
友にタバコをもらひ一服　大平伍郎
人気なき運河に映る青き月　瀬尾千草
燕の帰る道は遥かに　柴田由乃

沖津　秀美　捌

秋(ウ)の野の内緒話を風が聞き　貞
ポケットベルに14(アイシ)10(テ)60(ルヲ)と　端元凉子
当番で炊事洗濯新世帯　草
お好み焼きはいつも仲見世　良

月涼し幟はためく芝居小屋　松村あや

行水の背に龍の彫り物　涼郎

「吾輩」が渾名の三毛に見つめられ

書肆の扉を開けてふらりと　敦乃

石佛並びておはす岐れ路

渡し守にも風光る頃　良

喜寿の母矍鑠として花ごろも　沖津秀美

シュトラウス弾く春の楽堂　や

平成七年一月二十六日　首尾

於　岐阜市華陽公民館

夏の句会

小野　シズ　捌

新宗匠迎へて夏の句会かな　小野シズ

皿に盛られし赤い桜桃　市野沢弘子

山峡の水車の音の軽やかに　浅賀淑代

追ひつ追はれつ遠乗の道　高橋豊美

甘き香のブランド煙草月さやか　代

ルアーを作るやや寒の頃　美

さまざまな南瓜の顔の万鬼祭　同

きゃっと抱きつく年上の女　子

夫あるを忘れてをりし昼さがり　代

ガレージセール並ぶ鍋釜　子

高らかに髭の五人のマリアッチ　代
忰かみ乍ら注ぎ分ける酒　同
月冴ゆる自分史やっと書き上げて　子
屋根裏にある乱歩全集　美
子供等は未知の世紀へ夢を馳せ　ズ
菜飯で握る大きおむすび　子
南から北から集ふ花の駅　美
日がな忙しく鳥の巣作り　代

平成七年六月十日　首尾
於　大久保地域センター

夏椿

久保田庸子　捌

静かさの卓に一輪夏椿　久保田庸子

打水されし庭の青石　桑原美津

新調の帽子をひょいと手にとりて　丹下博之

自作の詩集駅に売りたる　佐藤良彌

月の舟ビルよりビルへ映す影　津

どぶろく入荷と揃ふおなじみ　之

丹精（ウ）の曲り絲瓜の重さうに　彌

ビエンナーレのこれぞ傑作　同

若き身を苦界に沈む乳房橋（※※）　之

才気換発お雪、お鯉も　子

哲学の細りゆく先邪宗門　之

富士の伏水樹海くぐりぬ　津

数へ日の忙中閑と月を見る　彌

友と聞き入る寒猿の声　之

女子テニスマッチポイント準優勝　津

漫画チックに夢の続きを　同

花となり光りと風に遊びたし　之

長屋の空はけふも麗か　彌

※乳房橋＝ヴェニス、カッシアーノの売春地区へ通ずる橋名。

平成七年六月十一日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

濃紫陽花

桑原　美津　捌

虚空蔵の旗濡れそぼつ濃あぢさゐ　桑原美津

梅雨の茶店の客招く声　梅田利子

つれづれにモダンアートを開きゐて　東　郁子

散歩の時間犬にせかさる　佐藤良彌

弓張の月をかすめて飛行灯　同

海苔簀たてる湾のをちこち　利

おくんち（ウ）の準備着々進められ　郁

法被姿で嘗（な）めるヘネシー※　彌

進駐の頃より凝りし日本趣味　利

ほつれし手帖里帰りせし　同

※オルフェウスに魅せられ魔界さまよへり　津

夢か現か恋ふ人の影　郁

置炬燵異母兄妹の定めなる　利

森の奥処（どこ）の梟の月　郁

来世紀へ平和祈りつ余生日々　彌

穴場を探し格安の旅　郁

爛漫の花の間より津軽富士　利

虻の羽音に眠気もよほす　彌

※ヘネシー＝ウィスキーの名

※オルフェウス＝ギリシャ神話に出てくる吟遊詩人

平成七年七月九日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

菖蒲池

佐古英子

回遊のここが見どころ菖蒲池

妹尾幸子

八つ橋近く軽鳧の行列

吉田憲助

球を撞く音遠くより響き来て

鈴木茂

定宿の湯につかる週末

幸

火の山の肩に半月かかりをり

英

鎧戸ゆらす秋の初風

膝送り

茂

西鶴忌ウィスキーのみ友として

憲

プロフェッサーは神か天狗か

英

処方箋少しも効かぬ金欠病

幸

満漢全席また夢に出る

真っ黒な猫が寝てゐる壁の中　憲
獣の如く生きて愛して　茂
尼僧院シスターの眼を盗みつつ　幸
サッカー応援若者をまね　英
月明かり鮟鱇鍋に伸ばす箸　茂
葺き終へし屋根斑雪（はだれ）うっすら　英
まほろばの大和の国は花盛り　憲
うたた儚き円舞する蝶　幸

平成七年六月十五日　首尾
於　電通築地南寮

かがり火に

佐々木有子　捌

かがり火にゆらぐ狂女や能舞台　佐々木　有　子

大鼓（おほかは）の音の響く青芝　倉　本　路　子

合宿の汗にまみれしシャツ干して　山　本　千代子

力瘤にもランキングあり　今　宮　水　壷

月を待つ酒は湯呑に注がれし　染　谷　佳之子

障子貼るとて糊をとろとろ　代

間合（ウ）ひよく鳴き立ててゐるちっち蝉　壷

単身赴任丁度二年目　之

スペアキー片眼つぶって渡されぬ　路

のぞき見をする谷崎の恋　代

秒針の壊れしままの鳩時計　之
ひゅるるるんるん木枯の駅　路
チーズフォンデュ囲むスイスの月冴えて　壷
救助犬連れ山を降りくる　有
賜はりし命愛しむ杖の跡　壷
夢託しつつ漕げるふらここ　路
水底に田舟朽ちをり花吹雪　代
はじめ終りのなき蜷の道　之

平成七年六月三日　首尾
於　大久保地域センター

寒蜆

佐藤良彌　捌

かたくなに口つぐみゐる寒蜆　佐藤良彌

一輪挿しに咲ける水仙　小野シズ

エッチングさまざまな線描くらん　下鉢清子

広場の床屋ちょっと休憩　岩井啓子

看板の横文字読める月明り　五味蓉子

浮桟橋のゆらと新涼　清

秋場所に化粧まはしの間にあひて　蓉

鏡を割りて升でぐひ飲み　彌

カラオケに心預けてラブソング　蓉

触れ合ふ肩に胸のときめく　ズ

美少女と呼ばれし昔知りし人　啓
河童忌がくる殉教の島　清
赤い月蝿取りリボン長くたれ　啓
栞はさんで読みかけの本　ズ
福眉毛しどろもどろに地震の指揮　清
焼き付けられた写真ピンボケ　彌
観覧車爛漫の花見おろして　ズ
夢を託して飛ばす風船　蓉

平成七年一月二十八日　首尾
於　新宿　滝沢

入学や

篠原　達子　捌

入学や一直線の飛行雲　篠原達子

椿の蜜を吸ひに来る鳥　雑賀　遊

雛葛籠家紋の少しうすれゐて　百武冬乃

まづはＴＶのスイッチをＯＮ　倉本路子

新都心ビルの谷間に仰ぐ月　神谷安子

屋台村にて囲むどぶろく　路

猪(ウ)罠の仕掛あれこれ教はりぬ　乃

有感微震けふは何回　遊

神技のヴァイオリニスト　ハイフェッツ　乃

アールグレイのティーでブレイク　遊

耳たぶが美味しいわよと囁かれ　路

相手変はれば替へる香水　遊

月代に蜘蛛の囲浮かぶ谷中墓地　乃

乱脈金融政府危ふし　安

ジャージーの泥まみれなるラガー達　同

痛散膏を腰にぺったり　乃

父祖よりの山に万朶の花大樹　路

おたまじゃくしの群るる池の面　安

平成七年二月二十二日　首尾

於　源心庵

少年の眉

島村　暁巳　捌

子はすでに少年の眉夏はじめ　長崎和代

釣りし岩魚を摑む掌　倉本路子

上布織る桟音軽く響かせて　佐々木有子

せっせと磨く紫壇文机　橋本　妙

望の月レポートやっと書きあがり　篠原達子

台風接近ラジオ告げゐる　島村暁巳

どぶ(ウ)ろくを下げて碁敵玄関に　達

町内会の寄附をお願ひ　代

吉良様は炭小屋尊師中二階　路

抽象絵画上下解らず　代

パトロンとヤングの彼を使ひ分け　有

大事な時にさし歯外るる　同

熱し易くまた冷めやすき薄手鍋　路

熊も穴より覗きゐる月　有

曽祖父は村の草分け屯田兵　達

春泥とばし過ぎるマラソン　同

合格の胴上げ続く花吹雪　巳

朝寝の夢に訪ひし故郷　妙

平成七年五月二十日　首尾

於　新宿区赤城社会教育会館

実朝忌

長崎　和代　捌

海はけふ白波立ちて実朝忌　長崎和代

鳶の鳴く声冴返る丘　副島久美子

卒業の袴の紐を胸高に　山崎一恵

サンドイッチをつまむひととき　中田あかり

望の月クレーンの影くっきりと　遠藤央子

残る蚊拂ひ話長々　恵

利酒[ウ]の名人未だ二十代　美

パンチパーマに締めるバンダナ　同

大地震避難所探す術もなく　恵

闇の静寂に響くしはぶき　美

ゆったりとエリザベス号入港す　恵
トランプ占ひ恋は成就と　央
閨の汗猫は何でも知ってゐる　り
つゆ雷のやみて月代　同
待ちかねし宗家に男児誕生し　央
持ち重りする名古屋ういらう　美
花吹雪チアーガールに選ばれて　恵
お玉杓子の泳ぐあき缶　央

平成七年二月二十二日　首尾
於　源心庵

古雛や

古雛やことしも美男にておはす　登坂かりん

桃の莟のひらく床脇

亀鳴くとエトランゼエの笑ふらん　椿紀子

エアーメールでテープ交換

仕舞ひ酒月かたぶきぬ草泊

夜学をひけて単車走らす

両吟

うすら寒百間堀へと招く猫　紀

筆太々と「まんぢゅう」の札

癒えがてにめがね拭ふもおぼつかな　ん

雪に吹かれて雲水の行く

カナリヤといふ名前なの恋の宿
　レースに透ける乳首黔ずみ
砂山の少年の肩織き月
　青島だあと東京の変
ちちははの明治は遠く夢となり
　士族育ちにひそむ気短か
花守りて花の盛りを花の陰
　春の匂ひに起こさるる朝

平成七年四月十二日　起首
平成七年四月二十八日　満尾
於　帝国ホテル―糠業会館―椿山荘―エドモンドホテル

とびの魚

町田　順風　捌

とびの魚一尾跳ねたり波浮港　町田順風

夏めく島のせはし荷おろし　小野シズ

竹細工教へてくれとせがまれて　若尾よしえ

つけ焼煎餅こんがりと焼け　川澄みよ

テレビ塔ホテルの窓に映す月　稲葉道子

山の麓に駒牽の跡　え

投げ入れのふうせん葛ゆらゆらと　よ

カルチャー通ひが恋のはじまり　ズ

エアポート・ナンナウェイの赤ランプ　風

行方わからぬ都市博の決　ズ

夏場所の天皇賜杯誰の手に　子
快気祝ひに参る氏神　同
寄り合へばオウムの話し嘆きあひ　よ
寒月きびし雪の稜線　え
日本の鴇は絶滅羽根残る　子
かごめかごめの園児等の歌　よ
城下町春爛漫の花の宴　ズ
野辺の仏に燃ゆる陽炎　え

平成七年五月二十一日　首尾
於　梅丘会館

植木市

山崎一恵　捌

青空やいつもの宮の植木市　山崎一恵

ゆきつ戻りつ池のつばくろ　東郁子

春暖炉新車カタログ拡げゐて　篠原達子

寝そべる子らはCDを聴く　橋本京子

山の端をくっきりと染めけふの月　郁

早稲酒あけて友をもてなす　京

いっせいに国体選手帽ふりぬ　達

ボランティアを望む若人　郁

上総掘砂漠に夢の井戸をほり　同

莫高窟で拾ひたる恋　達

うすものの黒きネグリジェ魔女の笑み　同

カードローンで自己破産とか　京

飽食の猫は鼠に首かしげ　郁

ゆたんぽ凹み月に転がる　達

リタイアの気儘暮しもはや十年　郁

ダンスサークル買ひかへる靴　達

花びらを入れて妹の郷便り　京

蜂の巣箱にいっぱいの蜜　同

平成七年四月二日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

表合わせ

冬萌や

冬萌や露地行灯に青々と　佐古英子
心字の池をおよぐ寒鯉　松本碧
新婚を囃して酒のすすむらん　豊田好敏
老執事知る男爵の情人（アミ）　逸見篤
大震災焼跡の街月暑し　鈴木茂
南無阿弥陀仏すする白粥　青木秀樹
また花の季節は来ると芸磨く　古田憲助
春山スキー賑かなころ　東明雅

平成七年一月十九日　首尾
於　築地治作

膝送り

あとがき

校正には主宰のお手を煩しつつ、梅田利子・久保田庸子・桑原美津・須田智恵・長崎和代の諸氏にお目通し頂きました。原稿の取纏めに発送にとご尽力の梅田利子氏には重ねて厚く御礼申し上げます。

下鉢清子

猫蓑作品集　VI

平成八年四月吉日　発行

発行人　東　明　雅

発行所　猫　蓑　会

定価　一、八〇〇円（送料実費）

印刷所　株式会社　岩田印刷

8・4・12